



水の文化祭りの

磁力



神崎宣武「生活行事のすべてが祭り」

家の祭り〈アエノコト〉

森田 悌「田の神祭りに見る日本人の神意識」

地域の祭り〈霜月祭り〉

鎌倉直衛「地縁が息づく神様王国」

都市の祭り〈天神祭〉

尾崎彰廣「浪花商人の元気で牽引」

合田博子「社会があるから文化がある」

水の文化楽習実践取材「守り伝えるための〈お弓〉の仕組み」

古賀邦雄 水の文化書誌「水の信仰・祀り・祭り」

阿部友子 シリーズ里川「古賀市ふるさと見分け」

祭りの磁力

湯立神事、水掛け祭り、船渡御に水ごり。
祭りと水には深いつながりがあるようです。

水は生命の源だから、神と関係が深いのは当たり前。
そんな風に理解してきましたが、

果たして本当にそうなのか。

八万の神というけれど、

祖霊は神様なのか仏様なのか。

祭りの持つスピリチュアルな側面は、
今の私たちにどう継承されているのか、いないのか。

日本人は祭り好きというけれど、

ちゃんと考えてみると、実はわからないことだらけ。

まち起こしや異世代間交流や伝統文化の継承といった、

現代における祭りの機能を語るにも、

そもそも祭りとは何かがわからなくては話になりません。

そう考えて、私たちの暮らし方を見回せば、

神様や仏様は

ずいぶんと遠ざかっているようにも思えます。

現代の私たちにとって、祭りとは何か。

古代の日本人の神意識まで遡って、

もう一度見直してみました。



本番に向けて練習が続く射放弓しゃほうきゅう (本文44ページ)

〈お弓役〉に選ばれた2名の若者が、前年の〈お弓役〉から作法を伝承される。仕事の帰りに吉浜八幡社に集まり、肉体的にきつい動作を身につけていく。本番が近づくにつれ、焦りと緊張感が増していくのが、見ている側にもびりびりと伝わってくる練習風景。2010年〈お弓役〉の坂本和也さん(左ページ)と弟の直敏さん(右ページ)。

水の文化 37号 2011年2月

特集「祭りの磁力」

生活行事のすべてが祭り 神崎宣武

家の祭り〈アエノコト〉 森田 悌
田の神祭りに見る日本人の神意識

地域の祭り〈霜月祭り〉 鎌倉直衛
地縁が息づく神様王国

都市の祭り〈天神祭〉 尾崎彰廣
浪花商人の元気で牽引

社会があるから文化がある 合田博子

水の文化楽習実践取材 編集部
守り伝えるための〈お弓〉の仕組み 44

文化をつくる祭りの磁力 編集部

水の文化書誌 古賀邦雄
水の信仰・祀り・祭り 52

シリーズ里川 阿部友子
古賀市ふるさと見分け 54

水の文化交流フォーラム2010報告

インフォメーション

59

58



生活行事のすべてが祭り

日本の祭りは、明治期の神仏分離というフィルターを外して見なくては

その本質がわかりづらい、と神崎宣武さんは言います。

神事・スピリチュアリティの側面が強調される祭りには、

神との共食から瞬時に力を得る、スタミナドリンクのような側面も。

なんとも変幻自在な日本の神様、仏様の姿が現われて、

共同体にとっての祭りの役割が、未然の手当てであるとはわかります。

明治のフィルター

今、我々が祭りと呼んでいるものは、ほとんど混乱状態にあって、とりとめがないことになっていて、そのために祭りの本質が見えづらくなっています。

混乱の始まりは、明治に神仏分離が行なわれたことにあります。法令上は〈神仏判然令〉。神仏の違いをはっきりさせるための法律でしたが、政府はそもそも文化土壌を無視した、あり得ないことをやっただけですね。

神仏判然令 1868年4月5日（慶応4年3月13日）から1868年12月1日（明治元年

年10月18日）までに出された太政官布告と神祇官事務局達と太政官達など、一連の通達の総称で、これに基づき全国的規模で公的に行なわれた。

日本人は、神仏習合で神も仏も渾然一体のものとして、日常生活を平気で過ごしてきたのでしょう。それを、はっきり分けようなんていうことはあり得ない。しかし、近代的な法治国家としては、宗教法人という制度に則り、神道と仏教を別なものとして登録する必要があったんです。

そして明治政府は神道を公事化して、国家神道という言葉を生み出しました。神道が「おおやけごと」で、逆にいうと仏教は私事、「わたくしごと」にされました。

そのため、仏教は葬式仏教にならざるを得なかった。神道が公事となったということは、国の公の行事に用いられるということです。

国家的な枠組みでいうと、神道と仏教はこのように規定されて、肌合いを分かったということなのです。しかし、一般の生活の中では一つの家の中に神棚があつて、仏壇があつて、宮参りして、寺参りして、生まれたときは宮参り、亡くなったときはお寺さん、というような暮らしが続いてきました。その神と仏が渾然一体とした暮らしは、いまだに続いています。

だから、政府の建前と民間の実態とにギャップが出たことが、今

の我々が宗教や祭りのことを理解する上で混乱が出ている大きな理由です。

日本人の宗教はなんだ、と言われたときに答えられる人が少ないです。明治の神仏分離というフィルターを逆の方向から通さないと、我々日本人の信仰や祭りの歴史とかが、明らかにならないんです。我々は明治のフィルターを軽視して、祭りや宗教行事が江戸時代を経て、古代から延々と続いているものだと思いがちだけれど、

けっしてそうではないのです。フイクションがあるのです。そのフイクションを外せば、かなり素直

に見えてくるはずですよ。

それで、極端に言ったら江戸時代までは、葬式以外は全部祭りな事化するから、神社における祭りだけが〈祭り〉と呼ばれるようになるからです。

特に新嘗祭にいなめさきというものは、農村の収穫祭と重なって、大変重要な意味を持たされましたから、これにかかわるものが本来の祭りである、という認識が前面に押し出されてしまった。

だから今の我々は、混乱した認識の中でなんとなく神社で行なわれる祭りだけが祭りである、と思っ



神崎 宣武

かんざきのりたけ

民俗学者・旅の文化研究所所長

岡山県宇佐八幡神社宮司

1944年生まれ。主な著書に『「まつり」の食文化』（角川学芸出版 2005）、『江戸の旅文化』（岩波書店 2004）、『江戸に学ぶ「おとな」の粋』（講談社 2003）、『おみやげ—贈答と旅の日本文化』（青弓社 1997）、『「湿気」の日本文化』（日本経済新聞社 1992）、『吉備高原の神と人』（中央公論社 1983）ほか



遠山郷霜月祭り／諏訪神社での金剣（かなつぎ）の舞。

家庭の祭りもあれば、お寺の祭りもあるのです。

祭りの語源

〈祭り〉という言葉自体も同じです。言語学者は二通りの言い方をしていますが、私はどちらも正しいと思います。一つは示す偏に巳と書く〈祀る〉。これがなまって〈祭り〉。

もう一つは〈待つらう〉。民俗学者の柳田國男は、「神霊を呼び出し迎えてこれらに、供献侍し、以ってそれを慰めまいらしめること」と述べています。つまり、どこからか訪れる神様、仏様を〈待つ〉。そして我欲を捨てて服従、奉仕するのが祭りの起こりだったという説です。

祭りという言葉を、この二つの意味からとらえればよいと思うんです。分けてどちらかを選んで主張する必要はない。二つ重ねて正当な場合もありますから。

多様な祭り

中央部から遠い所、あるいは大きな祭りから離れた所では、明治以降、公事化された祭り以外のものもいまだに祭りと呼んでいます。私がフィールドワークに出た昭和40年代ころまでは、南九州や沖縄

では「盆祭り」という言葉が普通でしたから。

八朔も祭りだし、正月も祭りだし。節句も祭りの言葉が部分的に残っています。

八朔 旧暦8月1日(朔日)のことで、台風や病害虫の被害を被ることが多いこの時期に、風雨を避け、五穀豊穡を祈ることを主目的として行なわれる祭り。

都市の祭りは、もともとから実際に祭りを行なう人と見る人に分かれていたんですね。頭(当)屋に当たるのも、家持ちの人だけ。だから、熊さん、八つつあんといった長屋住まいの人は祭りの構成員にはなり得ない。

村の祭りの場合は、ある年は構成員になれなくても、別の年は順番が回ってきて役目があるんです。都市の祭りはそこが違う。村の祭りは収穫の予祝であり収穫の報告であったから、特に農村部では全員参加となるのです。

都市の祭りは、収穫は関係ありませんから。だから村の祭りは春と秋。町の祭りは夏なんです。夏にやるというのは、疫病封じです。つまり、祭りというのは神仏な

どの超人間的存在を祀り上げて、その下に待つらん、とする行事のすべてをいうのです。ある特定の家庭でのみ行なわれる行事は除いておいたほうがいいかもしれませんが、それ以外のものを俯瞰して

見た場合、日本には実に多様な祭りがあります。

大きく分けると、家庭の祭り、集団社会の祭りに分けられるかもしれません。集団社会も、地域集団の場合、職能集団の場合、民族集団、国家的集団などと分けて考えると、整理されて理解しやすくなるでしょう。

しかし、今のところその作業は行なわれていません。と言うのは、神社側が自分たちのやっている神道行事が祭りである、ということに信じて疑わないからです。

日本の神社神道は、明治以降大切に守られてきました。そのため、明治以前に神道はなかったのかと聞かれたときに、返事に窮するような状態になっています。一般的に、文化人や民俗学者も臭いものには蓋をするような感覚になって、そこには触れないでいるのです。

ただ、この公事的な神社神道が、戦前、残念なことに軍国主義と天皇制に大きく偏って利用されたので、そのダメージがいまだに残されていて、余計触れないようになっていて、もうそろそろ、そういうことを平らにする時代になったのではないかと。ただ、明治政府によるフィクションというのが、あまりにも我々の中で育ち過ぎていて、その見直しを、祭りという切り口ならできそうな気がしています。



遠山郷霜月祭り／神太夫と姥の面をいただく二人の役回りは、オコビッコ（おふざけ）。男女の交歓が表現され、周囲も囃し立てる。

右：大阪・天神祭／地車講による舞の奉納。陸渡御に先だつて舞われるが、なぜか指先はずっとピースサイン。



す。

例えば、起工式のときに神道でお祓いをするのが特定宗教に偏るから憲法違反だ、と問題になっていますが、あれも明治以前は祭りにとらえられていました。明治になってからは、正祭式に対する雑祭式ざつさいしき。その雑祭式の中に地鎮祭もあるのだから、民間の古習を認めていないわけではないのだけれど、一般の人にはわからなくなっています。あまりにも渾然としていきますから。

祭りの要素とは

神事は祭りの一つのパーツです。祭りを構成する一つの要素です。そして、祭りを構成する対極の要素が直会なおひです。

折口信夫おりぐちのぶが祭りを構成する要素をある程度整理しているのですが、我々はそれを利用すればいいのですが、彼はこのように言っています。

折口信夫（1887〜1953年 日本民俗学、国文学、国学の研究者。異人を異界からの客人とする〈マレヒト信仰〉を提唱し、日本人の信仰や他界観念を探るための手がかりとした。

まず第一に、神仏への祈願。これは神事、仏事と呼ばれるものです。神主や長老が神棚に向かってパチパチと拍手を打つようなこと、儀礼ですね。

もう一つが、飲食。ご馳走によって穢れけがれを癒す。食養生ですね。つまり滋養になるものをそのときに集中して食べる。

私はこれから連想するのですが、多分ね、日本人のスタミナドリンク信仰なんかは、ここからきている。私がこう言うと、韓国や中国に行つて、「ここだつて同じじゃないか」と言う人がいるけれど、あれは日本のスタミナドリンクが渡つていつて広まっているのであって、もともと彼らの習慣にはないことです。むしろ、日常的に食同源の考え方がありますが、日本にはそれが乏しい。日本では、祭りでのご馳走こそが癒しの元という考え方が強いはずですよ。

これが集団社会になると、〈酒〉になる。特に節句になると酒に薬味を浸けた〈薬酒やくしゅ〉が用いられる。桃酒、菊酒の類いですね。

飲食、特に酒が嵩かさじてくるとそれについてくるのが芸能です。芸能は神様を慰撫する、接待する神事的なものもあるけれども、酒とともに必要が生じてくるものでもあります。

もう一つ、祭りの大切な要素であります。最近では言いにくい、特に女性の前で言うとき袋叩きに遭うものに、男女の交歓があります。川柳にも、「社前より裏がにぎわう村祭り」と詠うように、歴然と

した歴史の事実として外せないものなんです。祭りというのは、男女の営みとその地域社会で黙認された日でもある。古く万葉集、風土記の世界からそれが黙認されてきた。

だから、私生児であってもさほど差別されることなく、村社会の中で平然と育てられてきた。我々の二、三代ぐらい前までは、曖昧あいまいながらそういう常識でした。明治政府は、そういう習慣も正そうとしたんでしょうが、それですぐに直らないのが庶民社会の伝統ですからね。親が誰だかわかっている、「あの子は祭りの子供だ」と認め合う、今と違った村社会のルールがあったんです。

この風習は西日本のほうが強く残りましたね。それは、秋祭りの時期でも野外の交歓が可能だったからでしょう。だから、昔は「祭りの夜は出てゆくな」というのが、良家の教えだった。特に娘は、絶対に外に出さない。

古代の常陸・筑波山などには、〈嬬歌かひ〉（歌垣うたがきの東国方言）の風習が存在したことが『万葉集』などからわかっています。また「妻問い」という言葉もありますね。他所そこの男が吾が妻を口説いている、ならば我も人妻を呼ぼう、という高橋虫麻呂の記述が有名です。この日だけは、この山をお治めにな



る神が、昔から禁じない技だから、咎めてはいけない、と詠っているのです。それには酒と芸能というのが、景気づけには誠によろしい、とされる。

折口はそこまで書いてはないんですが、祭りを構成する要素として、祈願・祈禱、酒食、芸能、性交を挙げています。

神事か娯楽か

神輿や盆踊りなどは、神仏を慰撫する意味合いと芸能としての娯楽の意味合いがあつて、はっきりとは分け難い場合がありますね。

長野・遠山谷や三重・志摩半島の盆踊りなどは、芸能ではなく聖霊を慰撫するほうに主眼があるでしょう。音頭はあつても、動き自体が撫でる動作になっていますから。盆踊りの起源は、撫でることです。疲れたご先祖様、精霊が来たのを撫でてもてなすのです。つまり、手厚いもてなしにほかなりません。

こうして撫でていたものが、芸能化するに従つて、手が上に上がる。足も高くなる。あげくは阿波踊りやよさこいソーランになる。

精霊を慰撫していたものが芸能になって、それも最初は流しだったのが輪踊りになる。輪踊りになったところから、さらに派手に芸能

化していく。

今でも東北地方や南の島には、各家の庭で踊るといふ盆踊りが結構残っていますよ。それは、その家に招いた盆の精霊を、みんなだ慰撫する。家々を回るから、盆踊りと言わないで盆回しとかも言いますね。

そういう所には、お葬式のあとに行なう「貫気」という制度もまだ残っています。これはお葬式のあとに留まっている死霊や餓鬼霊の気を抜くために行ないます。宗派を問わず、このころは般若心経を唱えるところが多いですね。

同様に、祈禱もいろいろな形がある。神主が司る神事といわれるものから、シャーマンが行なうような呪術といわれるものまで。

酒食も宮座を組んでの限られたメンバーでの式三献(酒一盃と肴二品を一応納めるのを一献とし、それを三度繰り返して供する。俗にいう三三九度のこと)や、神饌の神酒を下ろして行なう直会などいろいろあります。儀礼的な酒宴、つまり礼講です。

礼講があつての無礼講ですからね。ですから直会にも、礼講的な直会と無礼講的な直会がある、という事です。このように日本の伝統文化は、おしなべて二重の構造になっている。これを整理していけば、見えにくかったものが見えてきます。

芸能も、より神事的に霊に向かつている芸能もあれば、娯楽的に人に向かつている芸能もある。

では、祀る対象となつていて神はどういう神か。それにも二通りある。一つは、平安時代の『延喜式』の神祇式、式内社の神名帳というあたりで、神様の鎮座まします所が明らかにされました。しかし、これは日本の神様全体のこと、というところ、大社に限つたことで、10分の1ぐらいしか網羅されていないのです。

神祇式
平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)、つまり古代法典である『延喜式』(905年(延喜5)藤原時平ほか11名の委員によつて編纂開始、927年(延長5)撰進。施行は、40年後の967年(康保4))。撰進の内、神祇官関係の式である巻1〜巻10のこと。
式内社
『延喜式』の中の神名帳に記載された神社のことで、社格の根拠となつている。
『延喜式』の巻9と巻10のこと。当時官社とされていた全国の神社の一覧。

式内社には二千八百数社しか数えられておらず、その後、文字が使われるようになるにつれ、物知りがいりるものを書いていくので複雑になっていくように思えますが、中、小全部の神社に祭神が定まるのは明治の神仏判然令以降のことです。神社神道を公事にしていくには、神様の名前がわからないと困るわけですから。
須佐之男命、大国主命などの名

前の通った神様を祀った神社が、全国的に圧倒的に多いのは、登録の期限内に合わせて、やむなく祭神を設けたからなのです。

八幡様なんて、いまだに祭神の正体がバラバラです。本来、八幡様というのは神仏が合体しての「八幡大菩薩」であって、八幡様の正体が神功皇后なのか仲哀天皇なのか、はたまた玉依姫たまよりひめなのか、ほとんど誰もご存知ない。残念ながら、明治政府をリードした人たちは、こういうことに関する素養がまったくない人たちだった、というしかありません。ヨーロッパの近代国家には、キリスト教という国の宗教がある、ということか

ら、神仏習合の伝統的な信仰を無視して、神道の国教化を図ったのですから。

だから祭りの祭式も神饌も、すべて伊勢にならう形になった。それで旧勢力となった出雲と宇佐が独自性を主張することにもなる。全国的には、二拍手一拝という伊勢式の作法が正当化されていますが、出雲に行きますと四礼四拍手二拝です。宇佐に行きますと、二礼四拍手一拝です。元の形を守っている。しかし、それで戦争にならないのが、日本の良いところですね。このことは、評価しなくてはなりません。

日本人の神・仏観念

日本の神観念は、基本的には祖霊信仰と自然信仰。仏観念も同じ。神道と仏教が習合できたのも、この二つを柱にしていたからです。

祖霊信仰というのは、稲作定住という歴史が背景にある。定住しているから、何世代も前のご先祖様の命日が決まって、墓参り、法要というのができるわけです。

これが点々と移動するのでは、あり得ないわけです。ですから、東アジアで稲作定住の歴史を1000年以上持っている所には、かなり共通している風習です。

祖霊という意識は、仏教伝来以前から日本人の中にあつたのです。山の頂上に霊が棲むとした。自然神も山にいる。もちろん海も無視はできません。沖縄のニライカナイもあります。沖縄のニライカナイもありません。しかし、割合にすると圧倒的に山を精霊の霊場とした。

ニライカナイ 沖縄や鹿児島・奄美群島に伝わる世界概念で、東(かつては辰巳の方角といわれたので、南東)の海の彼方、または海の底、地の底にあるとされる。

5万分の1の地図を見ると、生活圏に幾つか、必ず神様、仏様の山がある。御山、御嶽、御岳、明神岳、釈迦ヶ岳、不動岳など。海に張り出した所をミサキというのも、同様の意味です。御崎。こう

して見てみると、日本中に神様、仏様の山があふれ返っている。その中でも山容が優れている山には、富士山とか白山とか剣山という名前をつける。

ですから神様を祀る最も古い形が、山に登ること。それが定住社会になって少し山から離れていくと、山にいちいち登れなくなる。それで山の懐にお寺やお宮をつくって、山の上は本山ほんざんとか、奥の院とか言いだす。それで山を遥拝する形式になる。さらに平場に人が住むようになると、神社や寺も平場に出るようになるけれど、お寺には山号を残している。浅草の浅草寺の山号は、金龍山。みんな、自分の旦那寺の名前は言えるけれど、山号を忘れていきますね。それに山門もある。

神社は、いくら平場で新しくつくったものでも、鎮守の森をつくらなくてはならない。そうすることで、平地にあつても山にあつたときと同じような、いかなれば原風景を残しているのです。

日本の神・仏は変幻自在

もともとは、山の上ですべての霊が集たく。そして必要なときに里に下りてくる。里に下りてもらえるから、周期的に祭りができるんです。

これは日本だけの感覚だといってよいでしょう。日本の宗教観というのは、あくまでも人間に都合よくできているんですよ。私はこれをアムール原理と呼んでいるんだけど、神様、仏様は在所を固定しない。必要な時に、必要な所に、フーッと伸びていく。変幻自在。これはまだ本に書いていないけれど、やがて書こうと思つています。

だから10月を神無月という。神様が出雲のサミットに行つて留守なのに、なんでここで祭りができるんだ、なんて馬鹿なことを言うのは、その原理を知らないからです。唯一絶対神としての神観念でものを考えると、そういう疑問が生じてしまう。しかし、アムール原理で考えれば、出雲のサミットに行っているのは、アムールでぐうっと伸びている先っぽの部分だけ。いかなれば、外務大臣だけが出張するようなもので、ほかの大臣は常駐していることに等しいのです。

だから平場に出てきていても、山の上にはもともとの神様の一部が残っている。それを拝みたい人は、山まで登っていけばいい。それが奥の院です。便利なことに山の入口にも神仏はいるし、法要をやるときには町中の寺にも移ってきてもらえるし、家に招くことも





長野県・南信濃地域の遠山郷霜月祭りは、集落ごとに少しずつ異なる作法で行なわれる。この拾五社は、険しい山道を上った標高の高い土地にあるが、祭り当日は地元民、観光客合わせて、大勢の人で大変な賑わいとなる。

できる。

法要というのが、ここまで制度化したのも日本だけですからね。韓国、中国、小乗仏教ですがタイなどには、法要という制度はありません。これは明治以降のお寺さんが、自立しなくちゃいけないから、営業化して強化された制度です。

その間に名無しの権兵衛じゃ可哀想だから、中間社会にいる間は戒名とか法名を使う。三十三回忌というのは、その故人を知っている人間が供養できる一般的な限度、ということですよ。そこから先は各家のご先祖様ではなく、集団社会総体のご先祖様になる。これを祀るのが氏神となる。氏神信仰。総祖霊、不特定多数の匿名化された祖霊。この辺が、仏教と神道が仲良くやってこられた秘訣といえるでしょう。両方も、祖霊信仰が中心なのです。人間の都合で、ここまでつくり上げていった日本人の神観念、仏

観念は本当にすごいものだと思います。

祖霊信仰とともに自然信仰も根強いものがあります。世界でいうところのアニミズム。それは、未開社会で顕著な信仰形態とされていますが、日本ではいまだにしっかりと伝えられているのです。

日本の自然信仰は、端的に言ってしまうと、始めに山の神ありき。さまざまな霊を所轄する、受け入れるのが山の神だとしています。

そして山の神は、最古代においては唯一万能神に近かった。正月の神様「歳神様」は、ある時期だけ山の神が里へ下りてきて、歳神様の機能を各家に分配して果たした。田植えが始まると、田の神様に変身する。また、八朔を過ぎて、雨や日照りの心配がなくなると、もう田を守護する必要がないと山に帰る。四季折々の自然循環と同じように、神様が一年を通じて循環している構図だった。

北関東の童歌の中にもその構図が残っています。

正月様ござった

どこからござった

山からござった

ゆらゆらゆらと

標に乗って

山からござった

山の常緑の木というのが、山から下りる神様の乗りものになった。

正月に一般的には門松を立てますが、これも松枝を依代として山から下りてきた証し。あれは、いかなれば歳神様が乗ってきたハイヤーですから。だから、家の中まで入れない。かといって放り投げておくのは失礼だから、入口に立てておく。だから、あの形式をや

かく言う意味はない。江戸時代になると意職が造形的につくって商うようになると、松竹梅をあしらったり、和紙を飾ったりするようになった。しかし、本来的な意味からいうと、松が1本あれば結構なんです。樫を注連縄に取りつけるのもいい。

それから中国山地では、かなり広い範囲で、諺が伝えられていました。正月くれば 歳徳さん 節分過ぎれば 田の神さん 八朔過ぎれば 山の神 山の神が原始万能神だったことが明らかです。

龍神、水神といった水の神も山の神です。水を配るのは、水女神。特に奈良盆地にはたくさん祀ってあります。水が分水嶺から川を流れて、地下をくぐっていくことは、昔の人だって当然知っている自然の原理ですから。だから、水が涸れたら、雨乞いは山に上がってす

るわけです。山の神を直接祀るから山に登るのであって、「あれは

天に近いから」なんて馬鹿なことを言っちゃあいいけません。

海上の神も忘れちゃいけないけれど、日本ではなんととっても山の神。絶対神ではないけれど、万能神なのです。

そうやって循環してくれる山の神なんだけれど、アメーバの一端が山に帰らないことがあるんですよ。居心地が良いから、家の中に居着いちゃうんですよ。それを我が家の「山の神」という。

怒らずと怖いよ。

まあ、これは冗談ではなく、主婦のことをなんで山の神というかというところ、男と女とどっちが大事かというところ、女のほうだということ。子供を産む、ということだけでも大変なこと。だから戦争が激しくなると、女性は自然と保護される。牛でいったって、10頭の雌に2、3頭の雄がいれば、子孫を保つことの用が足りる。逆はあり得ないから。だから、原始女性は太陽であった、と平塚雷鳥も言ったんです。

亭主元気で留守がいい、とも言います。そして、主婦は家の中でしっかりと根を下ろす。だから、奥さんのことを「大黒様」ともいう。家の大黒柱は女性としたんです。それから「家刀自」ともいう。トジというのは、頭のことです。字は違いますが、酒蔵の仕込みの頭



右：遠山郷霜月祭り／拾五社での直会の様子。
左：天神祭／神域と現世を隔てる境界の役割を担う注連縄。普通の注連縄の前に、紙垂（しで）が下げられたアーチ状の注連縄が立てられ、両脇に笹竹が据えられている。

は杜氏といえますね。

アミーバ原理を支えたのは

日本で神仏のアミーバ原理が発達したのは、喰うことにさほど困らなかったからです。270年間も鎖国を続けて、安穩と暮らしていけるなんていうことは、ほかの国ではあり得ません。島国だから侵略が難しかった、という立地的な原因もあるけれど、この列島の中で自立して自給して喰っていたんです。

もちろん、大飢饉のときに娘を身売りしたとか例外的なことはあるけれど、今までの歴史検証というのは、東北は毎年そうだったみたいにいいうけれど、そんなはずはない。

これは、戦後の歴史学者が文献主義に偏り過ぎたことに因ること、歴史観を偏狭なものにした。文献も大事なんですけど、普通のこととは書かない。特別なこと、異常なことしか書かないのですから。銘々の日記だって、下痢をしたこととは書いても、通便が良かったこととは書かないでしょう。じゃあ、一生下痢をしていたかというのと、そんなことはないはずですよ。だから、絵図を挟むとか、庶民が書いたカナ釘流の道中記なんかも資料として併せて読む必要があります。

さすがに一国主義というか、日本人は一言語で一民族、という人はいなくなりましたが、こういう歴史観を長く幻想として抱いてきたんですよ。だから、日本人は日本人は、と一元化して言う風潮がつい最近までありました。

また、研究している人が、生活体験者でない人が多いのも問題でした。生活体験者なら、こういう結論には結びつかなかった、というような歴史観や民俗観が生じたのです。

日本列島は南北に3000km。中国やアメリカの南北にほぼ匹敵する距離です。自然信仰を考えたら、その広い範囲で、みんな同じであるはずがない。それが統一されて、いかにも一つとなったようにされるとどうなるか。神社神道の大きな祭具である榊さかきは、東日本にはない。だから、東京で売っているのはヒサカキといって、サカキもどき。葉が小さくて端にギザギザがある。だから当然、江戸時代以前で江戸で榊を祀っているかどうかの疑問を持っていいんですよ。

特に自然信仰については、本来、土地土地でさまざま。その多様性こそが日本の土着性であり、民俗文化としなくてはならない。その中で、ほぼどこでも望める高山が信仰の対象となり、広く共有され

てきた、というのが妥当だろうと思います。

シャーマンの役割

祭りが定例化する以前の古い時代には、非日常的な出来事にはシャーマン（呪術師）が対応しました。日本に限ったことではなく、原初はどこでもそうだったでしょう。祭りの日立てもその人が行なうということはありませんでした。それにシャーマンは、どんなに神がかったとしても、自分が喰っていけないようなことは占われない。

シャーマンは世襲ではなく、長老が認めた人がなっていくんですが、普通の状態では認められにくく、舌を切ったり、目を潰されたりしました。身障者になることも多かったです。明治以前は片目の神主というのは多く見られ、シャーマンが神主に移行する過程がうかがえます。

日本では、古代は女性になっていたシャーマンに、中世、近世では男がなるようになった。すると普通の形ではみんなが呪術性を認めないのです。そうすると、早い話が焼け火箸を目に突っ込んで修行したということになる。

私が23歳から24歳のころ、ヒマ



ラヤを歩いていたんですが、各地でシャーマンが焼きごてを足裏や手の甲に押しつけて、失神した振りをしている、ということは何回も見ました。日本でも山伏が火渡りをするでしょう。みんな、そうですね。見ている人が「すげえなあ」と感心するようでないしシャーマンとして通用しない。

まあ、近世、あるいは近代以降はそこまでなくても神主や僧侶が務まるようになったわけです。

韓国には、今でも家を建てるときなどに家相を見てもらって祓いをしてもらう「ヘムダン」というシャーマンがいて、在日韓国人の人でも100万円ぐらい平気で出しています。「ヘムダン」の基本的な条件は女性であるというのが標準化しています。

私が考えるに、身障者が自活するためにある分野の職業を空けていた、ということはあると思います。例えば、瞽女こせとか宮城道雄さんのような琴の師匠とか、按摩とか、目の不自由な人が就きやすい職業というのがありますね。こういうことを差別という観点だけではなく、社会福祉に近い機能を持つていただろうということを、見直す必要があるように思います。

瞽女こせ（こせ）目が見えない女性が、旅回りをしながら三味線を弾き歌を歌って糧を得る。
宮城道雄 1894〜1956年 兵庫県神戸市生まれの作曲家・箏曲家。8歳で失明。

1929年に「春の海」を発表。フランス人女流バイオリニスト、ルネ・シユメーと競演し、世界的な評価を得た。

さっきの歌垣における男女のことにしても、身体の不自由な方のことにしても、今の価値観とは違う許容社会もあったということ、歴史は簡単にはとらえられないのです。

時間、空間、人間の三つの要素が循環している。テレビでは天地人なんてやっているけれど、今、天地人のバランスが崩れている、とまでは言わないけれど、崩れやすくなっていますね。

観光化する祭り

交通手段が発達したことで、祭りが観光行事として人を集めるようになった、ということがあります。他所の祭りをわざわざ見に行くというのは、鉄道や自動車が発達して以降のことです。ごくごく最近のことでしょう。

その先駆けが京都の祇園祭りでしようね。祇園祭りは昭和40年代（1965年）から、山鉦を曳くのに学生アルバイトを雇いましたからね。東京の三つの祭りの神輿かきも、連に任せるようになりました。祭りの一部を請け負いに出したところで、一番最近起きた大きな変容がある。かつては自分た

ちで汗水流して何らかの役をこなしていたものが、見物人になってしまったのです。

東京の三つの祭り 神田明神・神田祭り／赤坂日枝神社・山王祭り／浅草神社・三社祭り

しかし、表向きに他所の人を雇ってやるような部分は、観光客にも見ることができなければ、元の氏子組織による儀礼や行事は簡単には見られなくなりました。そこへの参加は一般人はできない。だから、その部分に古くからのしきたりが残っていることが多いのですよ。

例えば祇園祭りだって、町内の神酒所とか、稚児を出した家での行事とかは、昔のようにやっているし、部外者が入って行っていることはできないんです。祭りが観光化して巨大化すると、かえってそういうところは見せないようになる。それは、中核にいる人たちの、ある意味でのアイデンティティーです。残念ながら、それが見えにくいから、表の大きく変わったところが前面に出してしまうわけですが。

伊勢神宮だって、式年遷宮はいくぶんか観光化しているでしょう。お木曳行事は、宮川渡会橋から外宮までの約1kmの道のりを曳くもの。もとは伊勢の旧領民だけが参加できる行事だったのですが、1



973年(昭和48)の第60回式年遷宮のときに、初めて一般の人も(二日神領民)として参加できるようになっています。しかし、それはあくまでも陸曳きであって、川曳きは絶対に外からの人間は入れません。

村の脆弱化と祭り

私が昭和40年代に歩き始めたときから比べて、消えていったり消えようとしている祭りは、やはり村の祭りです。都市は流動的に見えても、中核はほとんど変わらず維持されている限り、簡単には消えませんが、なんだかんだいって、人が住んでいますから。

村の問題は、この20年から30年に起きた顕著な現象として、祭りのときに子供を帰さなくなったことが挙げられます。これは親の責任で、今、泣いても遅い。物わりのいい親を演じ始めたことが原因です。

息子が都会の学校に行きたいと言えば、平日は工場に勤めて夜勤をやって、土日で田んぼを耕して親はフル回転で働きながら子供を都会に出したが、その子供を時々にも帰す手立てを考えなかった。その子供を放任することが、物わりの良い親だ、と勘違いした。そのダメージが、今、もろに出ています。祭りのことかというと、20年前に

は頭屋に当たったときには長男を呼び返したものです。こんなことは数年に一度しかないんだし、一年も前からわかってるんだから、3日や4日の休みが取れないはずがないんです。所によっては次男、三男も帰ってくる。長男は妻や子供も連れて帰る。これも、村や家の伝統として継承されたわけです。帰ってこなくていいよ、と言うのは、今は祭りも省略化されてるし、賄いだって仕出しを頼めば済む。お金さえ出せば、なんとかできる。だから老夫婦と近い所にいる親戚が手伝う。頭屋組と違って、近所の人も手伝ってくれる。しかし、その家の跡取りがない祭りとというのが、珍しくな

くなっていくと、祭りの伝承力は著しく後退していく。親ができなくなったときに、子供が五十面下げて帰ってきたところで、もう役には立たないんです。これは日本の地方を脆弱にして

機会がますますなくなる。私は、帰っていますよ。都会から帰ってくる人間が十何軒の集落に3人いれば、何とか祭りも維持できると思いますが。常駐するまでの必要はなく、時々でよいのです。

島の祭りは、昔から帰ることを義務づけた所が多かった。だから、残っているんです。いったん崩したものはもう簡単には取り戻せません。そんなところで村おこしは幻想にしか過ぎない。もっと早く手を打つべきだったんです。先日私は、神戸の灘に行ってきました。震災であれだけのダメージを受け、こここの不景気で随分落ち込んでいたけれど、それでもあれだけの酒蔵が維持されているというのは感心する。やはり、酒蔵の旦那衆には見識があった。その一番の功績は、1951年(昭和26)に甲南大学をつくったことですね。これは、後継者が東京の大学に行つて、東京付きになって帰らなかつたら困るからです。それじゃあ、慶応大学に匹敵する大学をつくらう、といってみんな資金を調達したということです。そのところでは、商業的な才覚といえはいいのでしょうか、灘では底力を感じました。

い村に同じことをしろ、というのは無理でしょうが、人口の流出を未然に防いだかどうかという点には、学ぶべきものがあります。沖縄が元気なことの一つの要因も、人口の流出をあの手この手で防いだことにあります。

その手だての一つが、中央に出て実績を残した人を野球の監督として呼び戻すことです。もう一つは、本土への練習試合に生徒を派遣し、その旅費はすべて後援会が持つ、というものです。だから島の八重山高校だって、甲子園に出られるんじゃないですか。沖縄復帰直後は、特別枠で出場して負けていたんですから、大変な進歩です。それが、相乗効果としてアイデンティティーを高めている。

子供や人材が残っている。そして外に出た人間を郷友会でつなぎました。私も二度ほど参加しましたが、久米島郷友会なんて、そのときは東京・小金井公会堂を借りて盛大にお祭りをやりました。そこで得たお金も久米島に還元されるんです。

こういうことも稀な例だけれど、存在する。沖縄の場合は、一例として野球での活性化が作用したわけです。

都会に出て稼いでいる人をどうやって戻すか、ということですが、知恵がなきゃ金を出せ、金がなきゃ

や帰って働け、ということですよ。国土交通省が提案した二地域居住の制度など、もっと利用されるとよかったです。年間100日ぐらい、都会で残った労働力を帰していく。地元は旅費と宿泊、食費を保証する。賃金は出来高制、ということにすれば必要な人材は確保できる。それには、まず地域の出身者を第一にすべきでしょう。これも、親が生きている間は帰れる。親が死んでからは帰りにくいでしょうから。

まだ間に合う所なら、親の生きているうちに、まずは祭りに帰郷してもらうことを是非検討してほしいですね。

穢れに対する未然の手当て

そもそも祭りをするのは、なぜでしょうか。なぜ、周期的に祭りを行ない、年中行事化されたのでしょうか。私は、考えを整理するための図式を書いてみました。

祭りをするのは、集団社会の穢れを癒すため。「氣」が「枯れていく」ことに対する未然の手当てというところで説明がつきます。

祭りをテーマにするからといって祭りだけで考えたらいけないのであって、「旅」というのもこれに当てはめれば、その意味は、一層、明確になります。よく言うよ

うに、日常(ケ)氣)からの一時的な脱出というのは、十分に説明材料になるでしょう。

旅は祭りではないけれど、祭りに準ずる穢れ落としにはなっています。ただ、旅は祭りの構成員と一緒にではない。もう少し、任意性が強い。有志集団が主体となるのだし、個々にもばらける。その違いがある。

集団社会が全体的に疲れてきたときに、つまり穢れ(氣枯れ)たときに祭りをする。今は、疲れたときには銘々で医者に行く。医療が不足の時代というのは、食養生ということが非常に大事だった。かといって、毎日、銘々が食養生しろっていったって、とてもできませんから。今だって、「メタボだから食養生しなさい」と言われて、自分でできる人は少ないですよ。それが集団社会だったら、いかに仕事を休んで、共同の目的のもとに役割分担をして、酒とご馳走を食する。今は集団社会のルールというのが稀薄になっているけれど、かつては生きるためには、集団社会の力というのに頼らざるを得なかったのです。

家を建てるにしても、村には建築会社なんてないですから、大工の棟梁のもとに集団社会に頼るしかなかったんです。

我々は集団社会の拘束というネガティブな側面ばかりをいったけれど、共働、扶助ということできると、集団社会というのは非常にまとまりが良いものであった。

同じような仕事、同じような考え方をしているわけだから、穢れが溜まる時期もほぼ量れる。それで「祭りをしようか」ということになって、来年も、再来年も、と定期的になるわけです。

忙しいときに、祭りはやりませんよ。だからその日程を組むときに、構成員のすべてが忙しさを解放される時期を見計らっているはず。もしくは、忙しくなる前。その象徴的な時期が春祭り、秋祭りなんです。

それは漁村社会の祭りを見れば、一層、明白です。公事化した神道が入り、カレンダー通りに行なわれるようになったことで定例化しました。もとは流動的だった。

なぜなら太陰暦の月齢に従っていたからです。月夜の晩に集まってくる魚もいれば、逆に月のない晩に集まってくる魚もいて、魚種によつてさまざま。それなのに、捕れるはずの魚がまったく捕れないときもある。不漁が続けば、^駄直しの祭りをしようかとなる。本来、その種の祭りは、定期的ではありませんでした。

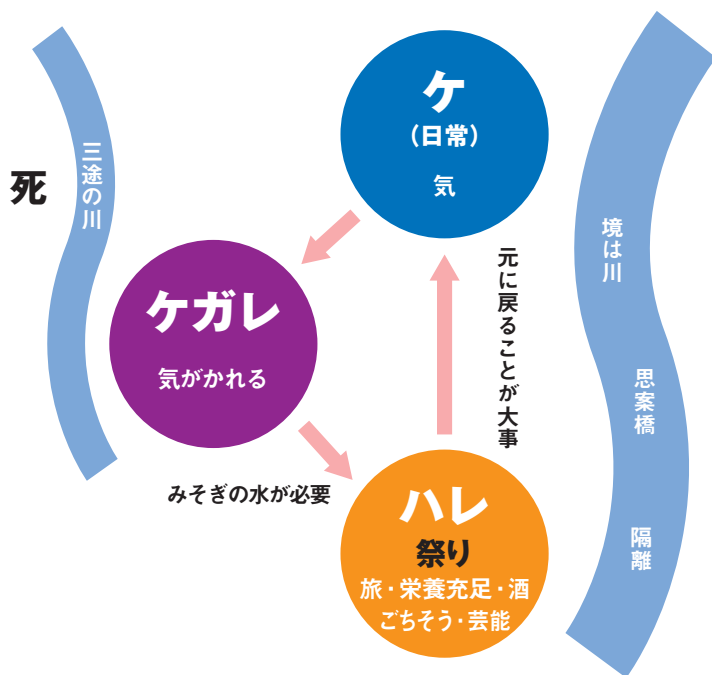
日常のケ(氣)が枯れそうになる。

悪所

ケハレ
内外公私
ケとハレが混ざり
混乱した状態

戯れ(たわぶれ)
氣がふれた状態

性



神崎宣武さんによる「祭り」フレーム

取材メモから編集部で作図

つまり穢れ(氣枯れ)てくる。それを防ぐためにハレ(晴)の行事として祭りを行なう。人間同士の申し合わせでは、時々都合を言う人もあるから、神様、仏様、ご先祖様を冠することになる。それで、いっせいに休んで共同で飲食に興じる。気晴らしを共同で行なうことで、氣が元に戻る。元氣となる。と、まあ、こんな図が描けるでしょう。(右図)

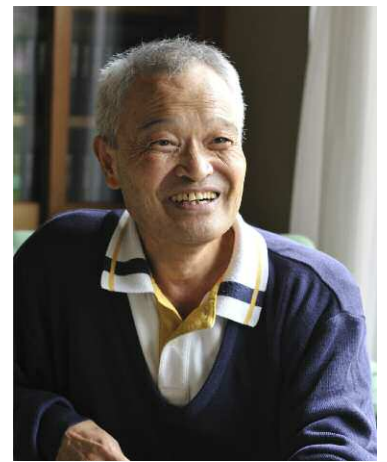


家の祭り〈アエノコト〉 田の神祭りに見る 日本人の 神意識

「近ごろの若者は」と言われるように、
信心する気持ちが薄くなったのは
最近の傾向と思っていましたが、
森田さんの古代の人の神意識をうかがうと、
不信心なのは何も
ここに始まったことではないようです。
水も土地も豊かで、超越神の存在がなくても
生きていかれた日本人が、
目に見える物に〈神霊〉が宿ると考えたことは、
アジアでも珍しく、
独自の神意識だったようです。



取材にご協力いただいた田中牛雄さん。石川県珠洲市でアエノコトの祭りを継承し続けている。田の神様にお供えするご馳走や食器は、各家でさまざま。そこに「家の祭り」らしいおおらかさを感じられる。神様からのお下がりには、家族にとっても減多にないご馳走で楽しみに待たれたことだろう。写真では、箸がお膳に置かれていることから田の神様が食事をとっておられることがわかる。



森田 悌

もりた てい

群馬大学名誉教授

1941年埼玉県生まれ。東京大学文学部国史学科、同法学部公法課程卒業。1971年金沢大学助教授、教授を経て、1995年群馬大学教育学部教授。2008年定年退任、名誉教授。上代から平安朝を研究著述し、『日本後紀』、『続日本後紀』を初めて現代語訳した。日本古代史専攻。主な著書に『推古朝と聖徳太子』（岩田書院 2005）、『天智天皇と大化改新』（同成社 2009）、『続日本後紀 上下巻』（講談社学術文庫 2010）ほか

唯物的な古代の神意識

僕は古代史が専門です。古代社会を見てみますと、どうしてもその後の展開とは疎遠になります。しかし、逆に考えてみると、日本の原型を見るには都合がいい。

当然のことながら、非常に古い段階での日本の在り方と、今とでは大きな隔たりがあります。例えば、日本の神霊というかスピリットは、常に物とくっついていて、物と離れて意識されることはいないですね。アエノコトでいうと、穀霊は穀物そのものでして、それを祀る。穀物の移動に伴って、神霊も移動してくるのです。したがって、日本の古代には超越神たる第三者の存在なんていう意識はなかったと思います。超越神といった発想は、多分にキリス

ト教などの唯一神宗教に出てくるものです。日本の場合は、物から離れた〈神〉というような存在を生み出す段階にまで至らなかったんですね。物自体に神霊がある、と見る。その神霊を祀るのが日本の祭礼なのです。

祀るっていうのは奉るで、物を差し上げることですよね。差し上げてうまくいったら報賽、お礼をするわけです。それが祭りです。極端なことを言いますと、目に見えないとか、感じられない、触れられない〈物〉については認識がなかった、と言いつつ切ってしまう構わないくらいです。「ちょっと、それは言い過ぎじゃないか」という人がいるかもしれないけど、僕はこのことに、かなり確信を持っているんですよ。

他界とか異界とかいう言葉を使ったりすることがありますが、日



本の古い段階では、他界観なんてありません。はっきり言って、古人は死者の世界を想定していません。目の前にある今だけです。見える物、あるいは触れる物、あとは音に聞こえる物とか、こういう物だけしか認識しない。その中に神霊がある、と考えているんです。

役に立つとか、お願いする段になって然るべき祭祀をした。祭祀は、構造的には、そういう具合に考えればよいと思います。

日本では天を祀らない

僕は論文や著書で、外から来る神霊に触れ、稲を育てる神霊、空から降りてくる神霊などについて書いていますが、これは、かなり新しい神意識だと思います。新し

いとはいうものの、みなさんの常識からいったら、まあ古い段階ということになるかもしれません。強いといえば、稲作を始めた前後のころには、まだ、そのような神意識はなかったと思います。

こういう不思議に思われるかもしれませんが、古い時代の我が国では、天を祀るといふ習俗はなかったんです。天を祀るのは中国の伝統的な発想です。天覆地載（天は人を覆い、地は人を載せ育む） 何ていいますよね。

『三国志』魏書東夷伝（この中に有名な魏志倭人伝が含まれている）を読んでいますと、中国の東方の諸国、満州から朝鮮、日本についての信仰形態について触れている部分があります。

そこには、朝鮮半島の中央部の南の辺りまでは、全部ね、祭天の

習俗があるというんです。しかし、朝鮮半島の一番南の弁韓（べんかん）、のちの任那（みまな）ですが、弁韓と倭国（やまと）については書いてないんですよ。他には全部書いてあって。

書いてないってことは、なかったことにはならないんだって言われたら、そりゃちょっと困りますけれど、やはり他の国について書いてあって、弁韓と倭国についてだけ書いてなかったとしたら、やはりなかったということになります。これは、日本では天を祀るといふ習俗はなかった、という証明になると思っています。

邪馬台国の卑弥呼は天を祀ってはいないんです。天はあまりに遠くつかみどころのないものですから、どうのこうのといた発想はなかったでしょう。だから、日本で天を祀るっていうのは、僕の

考えていうと、弥生時代が終わった段階以降ということになります。中国だと超越的なものとして天があるのですが、日本は中国のすぐ隣に位置しているのに、時代が下らないと、取り入れなかったのです。だから、日本の歴史の全体を考えたら、高天原（たかまがはら）なんていうのはかなり新しいはず。高天原は、よく北方から入ってきた觀念、信仰だといわれますが、僕もそのとおりだと思います。日本の基層文化は照葉樹林文化だといいますが、北方の文化が入ってくる以前の段階では、天を感じることはなかったのではないのでしょうか。関連して、星座のこともあまり知らないし、関心が稀薄ですよ。

ついでに、沖繩のニライカナイは海からだといえますけれど、それを日本の文化の本質にかかわると考えたなら、かなり問題です。折（おり）口（くち）信（のぶ）夫（のぶ）なんかを読んでいると、よく出てくるんですけど、僕の理解の範囲を越えていますね。ニライカナイのような觀念は、もともと南の南洋というか、島嶼部へ行ったら、ああいう世界観もあるのでしょう。ですから日本の伝統的な文化を議論するときに、沖繩の話を入れると、混乱して、わかりにくくなってしまふと思いますよ。

中国人にとっては、人間世界とは別な所（他界）として天がある。

そして死者の行く黄泉（よみ）がある。しかし日本では天について格別の意識がなければ、黄泉が存在するという発想もなかったということですよ。

先祖もせいぜい祖父父母まで

黄泉に触れたところで、それは、日本人は死んだらどうなるのだということですけど、死んだ直後は悲しんだり、霊がそこいらをさまよっているのではないかと考えていたと思いますが、しばらくすると忘れてしまつて、それで終わりです。存在が感じられなくなりますから。

我々日本人は、世界でも珍しい親不孝、祖先不孝な民族で、親が死んで何年かすると法事も「もう、終わりにします」ってなるでしょう？ 何回忌かまですると、お仕舞いになる。文明民族の世界でこういうのは、あまりないと思います。少なくとも東アジアの中国、朝鮮では、そんなことをやったら大変なことになります。

僕は学生によく、「君たちね、自分のおじいさん、おばあさん四人の名前を言えるかい」と聞いたことがあります。答えられない学生が多い。これでは、ご先祖様を大事にしているとは言えませんよね。



写真、上から／神棚には、めでたい文字や模様が細工された切り紙が下げられていた。／田の神様をお迎えする準備として火を熾す。／田中家では田んぼには行かず、家の中で神様をお迎える。／火打石で火花を起こすことを切火（きりび）を切るともいうが、火が魔除けになるというお祓いとしての意味があるようだ／神様が食事をされる前には、箸は俵の上に置かれる。



最近薄れてきたように言われるけれど、中国や韓国に比べたら日本人の祖先観というのは、もとから罰当たりな感じですか。それは近年宗教的な意識が薄れてきたからでなくて、本来そういうものだったのです。日本人が祖先崇拜しているなんていうと、韓国の人には笑われるでしょうね。彼らは千年くらい前の家系図を持っていますから。そして、先祖の名前を憶える術を心得ているのですね。

欽明朝に仏教が入り、推古朝以降それが盛んに信仰されるようになります。儒教も入ってきて、知識人の世界でそれらが浸透した段階で、祖先とか死後の世界に意識が向くようになりました。しかし、庶民のレベルでは普及しない。これは一貫して今日まで続いている傾向

と言つて過言ではありません。みなさんの常識になつていいるかどうか知りませんが、古墳時代に、古墳に人を葬つた後、死後のお祀りはどれくらい続けて行なわれているか知っていますか？せいぜい一、二回ですよ。棺を置く部分が堅穴式の場合は、遺体を一回しか埋められないけれど、横穴式になると何回も遺体を入れられます。その場合は新しく入れた段階で、またお祀りしますが、前の人のことは、もう忘れちゃいます。古い時代の天皇陵が肩ツバものだということは、しばしば言われていますが、そう言われるのは死者の祭りが継続して行なわれていなかったことによります。

物と神霊が結びついて、目に見えるものにしてはじめて神霊、スプリットと関係する、というのは、現今の日本文化にも濃厚にあると思います。いなくなつたら、存在しなくなつたら、終わりなんです。こういうことは、まさに伝統を引き継いでいると思いますね。

ピリットと関係する、というのは、現今の日本文化にも濃厚にあると思います。いなくなつたら、存在しなくなつたら、終わりなんです。こういうことは、まさに伝統を引き継いでいると思いますね。

アエノコトと嘗の祭り

古代史というのは残っている文献・文字資料は少ないけれど、解明に当たっては、残っているものを使うのが本来だし、それが僕ら古代史研究者の仕事です。ただ、それだけだと限界があるので、少ない史料をつなぐ部分を、何か別のところや視点に立って追究してみようと。それでやったのが、僕の場合はこの本（『田の神まつり』の歴史と民俗 吉川弘文館1996）なのです。

古代史の文献を読んでいて関心を持ったことの一つに、祭礼のことがあります。朝廷で行なわれる重要な祭礼行事に、嘗の祭りと呼ばれる三つの神事があります。11月の新嘗（もししくはへんじょう）祭りと6月と12月の月次祭です。大嘗祭は天智代初の新嘗祭のことです。嘗の祭りは、神今食ともいい、天皇が夜、神を迎えて御膳を進め、自らも食する神事で、真夜中を挟んで二度繰り返します。この二度の御膳を悠紀、主基の膳といいますが。この行事、神態ですが、真に面白く、興味の赴くままに僕は、文献でかなり勉強したわけです。僕は大学では井上光貞先生という方に教わりましたが、先生も神祇令（じんぎりょう）に関心があつてね。岩波書店から出ている日本思想大系の



『律令』の神祇令の部分は、井上先生ご自身が書かれています。

井上光貞

(いのうえみつただ 1917~1989年)
日本の歴史学者。東京大学名誉教授。国立歴史民俗博物館初代館長。専門は日本古代史。共編書の『日本の歴史』（中央公論社1973）シリーズは、ロングセラーを更新している。

僕も井上先生に教わりながら、祭礼に関心を持つようになって、それなりに知識を深めていったのです。その後、大学院が終わって1971年（昭和46）にまず金沢大学へ赴任し、そこで初めてアエノコトなるものを知りました。

それを見て、驚いちゃいましたね。向こうでは12月に入るとTVでもやるんですよ。これは面白いなあと思ひ、図書館などに行き、あちこちにある映像の資料を見せ

てもらって、「なるほど、なるほど」と一つひとつ感心しました。当時はまだ能登では、多くの家庭でアエノコトをやっていました。

家庭の中のお祭りなのでなかなか目に触れないけれど、現段階でも、かなり、まだやっていると思いますよ。ユネスコに登録されてちょっと脚光を浴びて、取材陣も来たようです。もともと、だいぶ観光化してしまったりところもあるようです。福井にも同性格の祭りが有り、そこではアイノコトと言うことが多いですね。相木^{あいのき}という地名が、日本全国にかなりありますが、アイノコトにかかわる地名だとする説があります。

僕が驚嘆したのは、能登のアエノコトを見て、神祇令から知られる嘗の祭りの在り方が、非常によ

くわかったからなのです。

アエノコトのときにお供えするのは、魚菜からなる食べものです。二股大根と人参が並べられるのは男女を象徴し、豊穰にかかわることはいうまでもありません。そして核心的な祭礼内容として、迎えられるのが男神、女神の二神であることです。僕は、この男女二神が迎えられ、接待されることにものごく興味をそそられたのです。

荒唐無稽な解釈も

ところで嘗の祭りについては、奇妙な解釈が行なわれてきています。朝廷で行なわれる嘗の祭りでは、天皇が神態を行なう神殿内にマトコオフスマと称する寝具を敷

き並べ寝所を設けるのですが、例えば折口などは、天皇がそこに入り込んで生命力を強くするのだ、という解釈をしています。また歴史学者の中には、天皇は一人で入るのではなくて、皇后というか、采女^{うねめ}というか、つまり女性と一緒に入るといふ人もいます。歴史学のほうでは聖婚という言葉を使いますが、模範的な交接待行をするのだといいます。僕の先生であった井上先生なども、天皇がマトコオフスマにくるまる秘儀があったと理解されていました。これは異様と言えは異様な説でして、僕には非常識、そしておかしい解釈だ、という思いを禁じ得ませんでしたね。

しかし、アエノコトと比較してみると、宮中の祭りでも田の神を

呼んできて接待していることがわかったのです。この視点は、すでに柳田國男が出ていまして、僕も『天皇の祭り 村の祭り』（新人物往来社1994）の中で書きました

が、柳田は「祭儀の中心をなすものは、（遠来の）神と君と、同時に御食事をなされる寧ろ単純素朴」な行事だと書いています。その遠来の神に当たるものとして田の神を迎えており、天皇が迎えるのも田の神である、という解釈をすると、非常にわかりやすくなります。こうして僕は、不思議に思っていたことが一挙に氷解したと感じたのです。

アエノコトでは、田の神様を家へ招き入れると、まずお風呂に入ってもらいます。天皇の神態でも同様に浴場が関係していて、嘗の



写真、上右から。神様に息がかからないように扇子を掲げ持って、食事を済ませた神様を、座敷から風呂場へと誘う様子。／風呂から上がった神様を、再び座敷に案内する田中さん。／袴と現代的なニットバスのミスマッチが、いっそうリアルな臨場感を生み出している。／神様は、座敷に戻って囲炉裏端の座布団でお休みになる。深く頭を垂れてお辞儀（じぎ）する姿からは、形だけではなく、心から神を敬う心持ちがうかがわれる。／神様が座敷にもどられたら、わざと煙が立つように火を焚く。燃料を惜しまず歓待していること象徴でもある。



アエノコトが残る奥能登の地域と旧・町名

国土地理院基盤地図情報（縮尺レベル25000）「石川、富山」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成19年）、道路データ（平成7年）、鉄道データ（平成20年）」より編集部で作図



祭りを執行する神殿に入る前に必ず湯浴みをします。もつとも嘗の祭りでは、古代の段階で湯槽の中に入るなんていうことはありませんから、天皇が羽衣という湯帷子を着て沐浴します。お湯掛けの儀式だと思えます。

神殿の中に置かれたマトコオフスマも、単に「お迎えした田の神に寝んでもらう場」と考えると非常にわかりやすいですね。実際、アエノコトでも家の中の稲俵の中で寝てもらいます。

アエノコトの場合には、主人が小さい子供の場合であっても、その子がやる。おばあちゃんに抱かれてとかね。天皇家も同様です。平安時代には幼い天皇もいますから、夜中にやるのでむずかるん

ですよ。それでも摂政関白が抱いてあやしなから、天皇がやるんです。むずかる子供のそばに寝台があるのに抱いて寝かせないのです。この事実が、折口の「マトコオフスマにくるまる」という説が成り立たない根拠になります。

しかも、嘗の祭りでは二度同じことをやります。夜中に二度接待の場を設けて、寝台まで改めて、神をお迎えします。研究者の解釈では天照大神、つまり皇祖をお迎えするというものになっていて、それが、天照大神一人をお迎えして、間を置かず続けて二度接待するというのはおかしい。

ここは単に、招じ入れた神様に食事を供してあとは寝んでもらう。そして、神様は男女二柱いらっし

やると考えれば、非常にわかりやすい。アエノコトがまさにその通りですね。男神・女神の穀霊神を迎えて接待するのですから。ただ宮中では、男女二神を別々に接待するわけです。『日本書紀』の中にも、天照大神自身が新嘗の祭りをやっている、とちゃんと書いてあります。ですから、天照大神が祀られているのではないことが、明白です。

この前の今上天皇の大嘗祭は、海部俊樹さんが総理大臣のときでした。当時、内閣告示を出しているのですよ。面白いから丁寧に読んだのですが、その中で「皇祖天照大神をお迎えするのだ」と書いてあって、僕はね、あれは間違っていると思いましたね。

このように、朝廷の嘗の祭りについて、いろいろ不正確な解釈がされてきているんですが、誤りを正し本質をはっきりさせることは、やはり重要ですよ。この点で、能登のアエノコトは僕に大変な示唆を与えてくれました。

朝廷の祭りももとは天皇家の家の祭り

結局、古代律令国家の建設に向かって大きく歩を進めた天武天皇が即位した段階で、国家意識が急激に発達するのです。お祭りも国家祭祀ということになり、変わりました。大まかにいえば、朝廷、あるいは今の皇室のお祭りとしては、そこで変えられたものが、現

段階までできているということです。古代には祭事は女の人人がやっていた時代があって、段々男の人に代わっていく。これは政治社会で、男性の力が強くなったからでしょう。

天武天皇以前の段階、大化の改新の段階などを見ていると、嘗の祭りを天皇家の祭りとしてやっているのです。天皇家が嘗のお祭りをするときには、大臣や皇子たちは自分の家の嘗の祭りを、ちゃんとやっているのです。当今の天皇の執行する祭りでは、皆さん、列席することになっていますから。嘗の祭りについては、天武天皇ががらっと変えたのです。僕はそう思います。

なお、祈年祭は歳神の祭り、つ



まり農作関係の祭り、2月4日に行なわれます。これは規模が大きいけれど、天皇自身は特別な神態をするわけではありません。中国のお祭りを持つてきたものです。

新嘗祭と月次祭の場合では、親修、つまり天皇ご自身がお祭りをしますから、重要な祭りというこ

とで後々まで存続しています。月次祭は江戸時代に廃絶してしまいましたが、新嘗祭は昭和天皇も、今の天皇もちゃんとやっています。

毎年ニュースになる天皇の田植え行事は、昭和天皇から始まるらしいですよ。六国史などを見ますと、天皇が田植えをしている農民を近くで眺めるといふ記述はありますが、自分が田植えをするという事はありません。天皇の田植

えは国民との一体感をつくらうという、政治的な発想に始まるのでしよう。

六国史
奈良時代から平安時代前期にかけて、国家事業として編纂された六つの史書。
『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』の六つで、一般に国史とされる。

祭りの猥雑さ

万葉集には民間の新嘗祭に関係して、二つほど和歌が残っていて、それに当たりますと、嘗の祭りは女主人がやっています。家刀自いそじ（家事を掌る女性のこと、主婦）がやります。夫を含めて家の者を全部追い出し、家内を神聖な空間にして、家刀自が穀霊である神様

を迎える。男衆を追い出しているので、言い寄る人が出てくるんです。男女の問題が起きたりしてね。それで恋が生まれて、万葉集で詠っちゃってる。

日本の祭りの一つの特性ですが、神聖性という要素とともに、多く猥雑性を伴っています。男女の出逢いの場だったりしますが、ケースによっては、もう、めちゃくちゃというか。口にするのがはばかられるようなことも起こっています。神様を迎えるの宴、神宴をやっていると、他人が多数上がり込んで来て、乱雑、猥雑になるので、禁令を布告するなんてことが行なわれたこともあります。

民間では古代の段階ですと、月次祭に当たる祭りのことを宅神祭たくしんさい

ヤケの祭りといえます。12月の月次祭は冬の内ですが、春の耕作開始の前にした予祝の祭り、そして6月の月次祭は、稲が花を咲かせる穂孕み期ほほらという大切な時期に、

稲の生長がうまくいくようにとお祭りするわけです。これは東南アジア、タイ辺りの稲の祭り、かなり近似性があるようです。

日本の農村社会の例では、夫婦が夜、田の縁に出かけて行って、セックスを稲に教えるというのがありました。性行為により、うまく結実するよう感染させるわけですね。あるいは嫁入りになぞらえる。

タイなどでは、穂孕み期になると、田んぼの周辺に嫁入り道具を並べるようなことをしますね。神聖な婚儀に相応しくなるよう静かにし

なければいけない、というタブーがあったりします。

出稼ぎをするエビス大黒

たまたま能登に残っているアエノコトも、原型を保っているというより、かなり改変されていると思います。田の神を迎える主人は袴かましもを着ていて、服装などから見ると室町時代ですから、元々の原型である、万葉集などに出てくるものとは、かなり相違することが確かです。

北陸の場合、中世になると、真宗が入りました。真宗は、キリスト教みたいな一神教的要素が強く、他の信仰を迫害して潰しています。たまたま能登は辺境で、そのため

アエノコトが残ったということですが、先に福井のアイノコトに触れましたが、福井県や富山湾を挟んで能登の対岸である富山県・黒部などには、祭りがかなりバリエーションとして残っているようです。

黒部にはエビス祭りという特異な祭りがあります。11月20日にエビス神を家に迎え入れ、お風呂に入れ、ご馳走して寝んでいただく。1月20日には外へ出て行っていただくという、形態はアエノコトとまったく同じですが、ここでは迎えられるのが田の神じゃなくて、出稼ぎの神なんです。

多分、アエノコトの形態に近いようなことをやっていたのでしようが、黒部の辺りは明治のころから出稼ぎが始まるんですね。それで人々の生業の変化に伴い、変わってしまふのです。迎えられるのは、エビス神だけじゃなくて、エビスと大黒二神になっています。

ここでは二神、そして二膳を供することが重要なのです。アエノコトも二神、二膳だったでしょう。ここにエビス祭り、エビス講とアエノコトの共通性があり、類似の祭りと推測することができるのです。

このエビス祭りでは、家の主人がまだ明るいうちに、提灯を持って鉄道の駅に迎えに行くんです。ですからこの日は、提灯を下げて

エビス・大黒様を迎えに来る主人が駅にいる。何事かと、結構、驚きますよ。

黒部のエビス祭りはアエノコト同様に奇祭といつてよいものですが、黒部ほど丁寧ではありませんが、全国各地の農家でエビス講という形で行なわれてきました。

エビス・大黒の祭りは関西に始まるもので、兵庫県西宮の西宮神社に由来します。この神社は商人に信仰され、エビス講は商人の祭礼として広がりました。

近世になると商品流通が盛んになり、商人が農村へ品物売り込む、あるいは買い上げる、という行為が展開されるようになります。この経済活動との関連で、エビス信仰、エビス講が農村部に広がったのです。

結局、田の神よりエビス・大黒のほうが有り難いということ、変わっていった。商人資本の力というの、一般農民には強力なものとして映ったのでしよう。それで経済力を持つ商人連中がやって

いるお祭りということで、農民たちがエビス祭り、エビス講を取り入れたのです。江戸の大店の商人も大々的にやっています。

エビス講は、大分新しい祭りですね。江戸時代はおろか、僕は案外、明治になってから始まっているところがあるのではないかと思

っています。僕の住むこの辺り（埼玉県）でもやっていますよ。僕の生家でもやっていますよ。たいいていの家には古ぼけた黒っぽい木でできたエビス・大黒二体があつて、対になっている。それを並べまして、必ず供えるものに尾頭付きの魚がありました。

家の祭り

繰り返しますが、元来、お祭りは「あることを祈願する」、次いで「それが成就したらお礼をする」ということなんです。これは我々の社会でも立派に生きています、

今でもよくあるわけです。例えば受験のときに絵馬を買って納めるなんてね、まさにそれだと思いませんか。そして当然のことですが、人々の最重要関心事項は生業絡み

ということになりますから、歴史社会において農業経営の単位であった家族、家庭により行なわれる祭りがクローズアップされることになります。

ちょっと変わった祭りとして群馬の北の山の中、高山村という所で行なわれているものに、小池祭りというのがあります。そこでは11月の寒い時期の未明に集まって、お祭りをしているんです。オテノコボリといひまして、手の上に赤飯を載せて皆で食べながらお祭り

をする。小池一族を構成する家々がそれぞれ神様が宿る小屋というか、小さな神殿をつくって、お供えをします。この神殿には入り口が二つついています。従って二柱の神様を迎えているのですね。これは外でお祭りをしているんです。小池一族の祭りにして、家々の祭りであることがわかります。

これなんかエビス・大黒の祭りの原型で、遡ればアエノコトにも共通するといつてよく、家の祭りなんです。

稲作というのは生産性が高いですから、経営を維持することを家単位でできる。これは日本文化を規定する、非常に重要な条件じゃないでしょうか。個人という単位では無理ですが、家という単位でなら何とかやっています。

中国では家を越えた組織として宗族があり、中近東あたりですと、何かというと部族などという組織が出てきました。人々はそれとの関連で保護、また統制されてきているんですが、日本にはそのような存在はありません。家族でやっています。家族でやっています。家族でやっています。

ていけるといふことから、突き詰めて言いますと、元来、日本の社会の構成単位は、まずは家族で、共同体というようなのはなかつたときでいいと思います。中世になりまして、村落共同体としての性格を有する郷村制が展開するよ

うになります。古代においては、そのようなものはありません。僕は一貫して、日本の祭りには、家という単位でやる流れがある、と言ってきましたが、それは別に、ある時期以降、集団でやる祭りが出てきます。郷村制などの展開と関連するわけですが、現代の祭りには、多分にその集団的な性格を継承しているところがあると思います。ただ僕は古代史家ですから古いほうに関心があるので、古いほうを見ると集団でやる要素は少ないのです。

目に見え感じられる風と水

朝廷にとって三つの祭、11月の新嘗祭と6月、12月の月次祭に準ずる重要な祭りとして、風の神を祀る祭りと水に關係する祭りがあります。風神を祀る龍田神社、水絡みの廣瀬神社の祭りです。4月と7月に執行される両神社の祭りには、朝廷から勅使が遣わされて事に当たることになっています。

風神祭りが行なわれる龍田神社（奈良県生駒郡斑鳩町）は、JR関西線が通っている峡谷の入り口に鎮座し、大阪平野から奈良盆地へ風が入る通路に沿っています。龍田神社のそばには『古今集』に「唐くれないに水くくるとは」と詠われた龍田川が流れていますが、



上2枚：輪島市かやぶきの郷コミュニティ施設、茅葺庵〈三井の里〉で行なわれたアエノコト。報道陣の多さに、田の神様もビックリされたことだろう。座敷に用意された座布団が、こちらでは1組。床の間の右に仏壇、左に神棚が見える。下：時国家のアエノコト。



大和川と合流する地点から少し上流に上がると、佐保川、初瀬川、富雄川をはじめとする奈良盆地を流れる川の水が一所に会して、大和川に合流する廣瀬の河合という地点があり、そこに廣瀬神社が鎮座しています。言うまでもないことですが、大和川は先の峡谷を流れて大阪平野に出、大阪湾に流れ込んでいます。風神祭では、悪風が吹かず稔の豊かなることを、廣瀬の祭りでは山から流れ出す谷川の水が甘水（よき水）となり、稲を育て豊作になることを祈願しています。風も水も目に見え感じられませんから、古代人はそこに神霊を見出し、祭礼を行なっているのです。

群馬県には榛名山、また長野県との境には浅間山のような、歴史時代に入って噴火している火山があるために、噴火のときの火山灰が村や耕地を埋め、当時の在り方をそのまま残しているような所があります。水田や畑の跡といった、古代社会にかかわる考古学的遺構です。火山噴火で埋まった遺跡には、イタリア・ベスピオ火山によるポンペイが有名ですが、群馬には、日本のポンペイといわれるような遺跡があるんですよ。

よく使った祭祀用具で、そこで神祭りが行なわれていたことがわかるんですね。水田の場合ですと、取水口と思しき地点であることが多く、農民が自分の水田に良き灌漑用水が滞りなく入ってくることを願い、祭ったような様子を読み取れるんです。今でも農民が、水田耕作開始時に取水口で神祭りをすることがあり、それを水口祭りなどといいます。古の人々もそれをやっています。この祭礼は、朝廷の場合でいえば、廣瀬神社の祭りに通じる性格のものであったと見ることができそうです。

なり、風雨が穏やかに推移し良き収穫が得られることを祈願して祭りをしていく、と見ることができそうです。こうなりますと、朝廷の龍田神社の祭りに通うものを確認可能ですね。これらから、古代人は自分の耕地での稔がうまくいくように、というところで祭祀を行なっていたことが推知されます。耕地の隅で行なわれるこうした祭りも、先に述べた家の祭りの流れの中で把握することができるとは思います。

稲作に関しては、田の神が稲、穀物そのものであるのに対し、用水、風雨となると、稲の外部の存在となり、いわば環境絡みの要素となります。古代農民は、環境の神霊をも齎（もたら）き、祭ることをしていたわけです。結局、古代人は、まずは目に見える、感じることでできる物を信頼し、そこに神霊を見る。それをお願いし、首尾よくいけば報賽、お礼をする。こうして具体的な場面場面面に即し、祭りが生み出されたのだと思います。アエノコトはこの流れの中で解り得るものであり、日本人の主生業である稲作にかかわるだけに、それを典型的に示していると解されるのです。





地域の祭り〈霜月祭り〉

地縁が息づく神様王国

湯立神事の奇祭といわれる遠山郷霜月祭り。

長野県の最東南端で、美濃と三河と遠江から信州の内陸に入り込んだ地である遠山谷が〈神様王国〉と呼ばれているのは、神にすがらなければ生きていけない厳しさの裏返し。

それでも湯立神事を再生行事ととらえ、ポジティブに楽しむ

和田諏訪神社遠山霜月祭り保存会の鎌倉直衛さんにお話をうかがいました。

厳しい立地

中央高速飯田ICから遠山郷に向かう道すがらには、天竜川のそこかしこに砂利採取の拠点がある。急傾斜地を削りながら谷底を流れる川には、山から崩落した土砂が流れ込むからである。

この地域では山地崩落のことをナギと呼ぶそう。ナギによって峡谷が閉塞すると天然のダム湖が形成され、やがて水圧に耐えきれずに決壊する、という現象が繰り返されてきた。1949年(昭和24)にも山津波が起きて井ノ木沢が押し出され、遠山中学校が流されたというから、この地の人々は大変厳しい自然条件の所に暮らしてきたのである。

ナギは蛇抜けとも呼ばれる。崩落の痕が緑の山中に赤い地肌を露出させ、大蛇が這った痕のように見えるからだという。急傾斜の山の中に、鳥や池という地名が残るのも、天然ダム湖がかつて存在したことを裏づけるし、そういう地名の所には氾濫原の跡が残り、砂が堆積している所もある。

三峰川、小洪川、遠山川は山深い地域の水を集め、中央構造線に沿って深いV字谷を刻み、やがて天竜川へと合流する。遠山谷、遠山郷と呼ばれているのは、その内

の最東南端に位置する遠山川水系をいう。この深い谷は、諏訪湖に端を発し、赤石山脈と伊那山脈との間を南北に走っている。これは中央構造線と呼ばれる世界有数の大断層だ。関東から九州まで西南日本を縦断する大断層系で、中央構造線を境に北側を西南日本内帯、南側を西南日本外帯と呼ぶ。一部は活断層である。

遠山郷の歴史

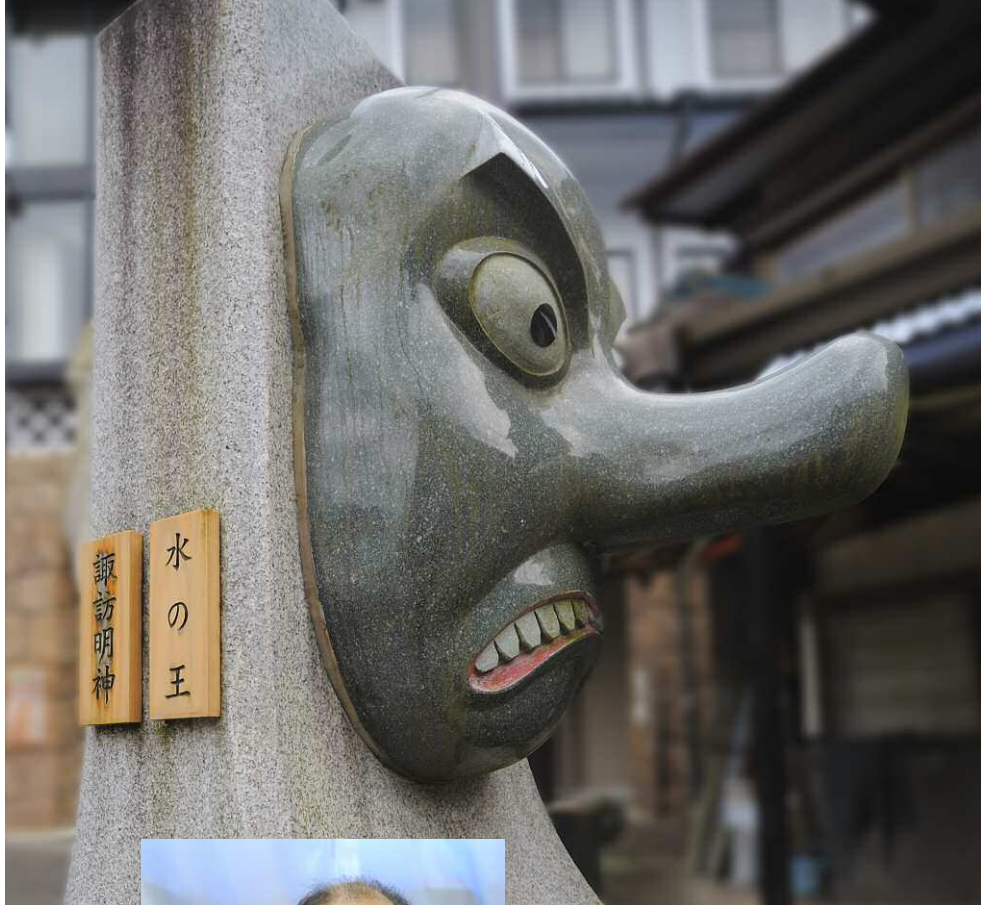
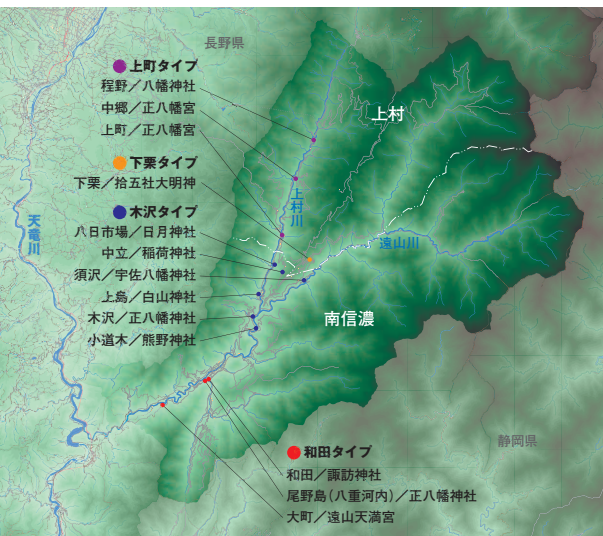
遠山谷に残る地名から見ても、自然災害に苦しめられてきた歴史を推測できる。現在〈神様王国〉と呼ばれるほどたくさん神や祭りが残るのも、頻発する大災害や凶作による飢饉、疫病流行が背景にあるのだろう。

急峻な山腹やわずかな緩斜面には、縄文時代の居住跡も確認できる。文献に最初に登場するのは、1186年(文治2)『吾妻鏡』。年貢を納めていない荘園名として「江儀遠山庄」の名前が登場する。美濃の「遠山庄」と区別するため、江儀山の名前を冠したと思われる、遠山とは書いて字のごとく、僻地を思わせる名前である。

1185年(文治元) 鶴岡八幡宮



秋葉街道には、たくさんの神様の面が石に彫られていた。険しい山々の谷筋に開けた街道は、三河、遠江、信濃を結ぶ重要な要衝であった。



諏訪明神
水の王

国土地理院基礎地図情報（縮尺レベル25000）長野・静岡）及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成20年）、鉄道データ（平成20年）、行政区域データ（平成7年、平成21年）」より編集部で作図



鎌倉 直衛さん

かまくら なおえ

和田諏訪神社遠山霜月祭保存会会長
南信濃まちづくり委員会副委員長

1935年飯田市南信濃和田生まれ。
1990年ごろから保存会会長を務める。

「なにしろ、祭りが好きなもんで」と言う鎌倉さん。霜月祭はとにかく長丁場。面が登場する（式次第の十二）のは、諏訪神社の場合深夜になるので、次ページの写真のように明るいうちから踊り続けている体力に、ただただ驚嘆する。

の供僧二十五坊中の蓮華坊の料所となった。信濃国で唯一の鶴岡八幡宮の神領である。選ばれた理由は不明だが、豊かな森林資源か、秋葉街道（かつての諏訪道）が通る交通の要衝としての価値が目当てだったのではなからうか。

鶴岡八幡宮の荘園となったために、八幡社が分祀勧誘された。鎌倉姓を名乗る家も多く、鎌倉との関係が色濃く残る地域である。

遠山氏は、鎌倉時代後期には地頭代として荘園を管理していたとみられるが二つの説があつてはつきりしていない。遠山氏の中でも著名なのは戦国時代から江戸初期までの遠江守景広と土佐守景直の二代で、1572年（元龜3）武田信玄が遠山谷を通過して遠江・三方原に侵攻したときには軍事輸送の大役を果たした。武田家滅亡のちには家康に属して所領を安堵され、家康の関東移封に伴っていったん関東に移ったのち、再びこの地を領有している。

しかし、1618年（元和4）土佐守景直の没後に跡を継いだ加兵衛景重がわずか2年で死亡。ここから起こった相続争いがいさめられて改易となり、久しくこの地を支配した遠山氏は滅亡することになる。遠山一族は改易後も帰農して名主などを務め、遠山谷に留まった。

遠山6カ村は一部を除いて幕府の直轄領とされた。一説には、豊富な森林資源を幕府が手中に収めようとしたための改易ではないか、ともいわれている。また、村人の中には、百姓一揆によって遠山氏が滅んだと言う伝承もある。ここに遠山氏の遺恨を鎮める、という要素が、霜月祭りに加えられたのである。

改易後は早くも江戸城天守閣の用材が伐り出され、1677年（延宝5）からは年貢を米ではなく樽木で納めるようになった。しかし、過度な伐採によって100年後には尽山（つじん）となってしまった。そのことは、年貢が1776年（安永5）から金納になっていることからもうかがえる。それでも1788年（天明8）京都大火で類焼した東本願寺の再建のための用材を、遠山谷の25の山々から伐り出している。

このときの経緯を紀行文風に書いたのが1798年（寛政10）華誘居士による『遠山奇談』である。

用材を伐り出しに遠山を訪ねた遠州・浜松の僧と同行7人の経験と聞き書きを元に、絵図を加え、奇抜で摩訶不思議な体験談がちりばめられたこの紀行文については、遠山研究者の間に賛否両論あるものの、遠山に対する関心を全国に広める結果となった。



湯立のための水の調達にも、細かい決まり事があり、和田タイプでは「浜水汲み」という。両親のそろった男女が川縁に山神と水神の幣束を立てて注連縄を張り、その間から七柄杓半の水を汲むが、川の流れて逆らってはいけないとされる。左は四十二の面の中でも、舞が特に難しいといわれる猿の舞。(猿田彦大神)で悪病をサル、エンコ(縁故)を結ぶ、にかけたという。左下は遠山郷土館。戦国時代、この地の領主であった遠山氏の当時の栄華を偲び再現された和田城が郷土館になっている。係の人のお顔を拝見すると、前日、猿を舞った方だった。



1718年(享保3)の遠山大地震に続き、1731年(享保16)には3年続きの凶作で、6カ村合わせて1530人の餓死者を出す。和田では当時の人口880人中320人が餓死したとされ、山間集落の厳しい現実がうかがわれる。

遠山谷はまた、民俗学の宝庫といわれ、柳田國男、折口信夫も訪れている。地理的には本州内陸の奥深くで海から遠く、山に閉ざされてはいるが、道は通じており、外に開いた窓から流入してきた文化が、この谷で醸成され独自の形を生み出した、と『遠山谷南部の民俗』(飯田市美術館2008)の巻頭に書くのは、柳田國男記念伊那民俗学研究所所長の野本寛一さんだ。野本さんはまた、「民の幸せ」を意識するのが民俗学であると柳田は考えていたし、今もそう

でなくてはならないのだが、民俗学的蓄積と現実の生活様式が乖離する現今にあつては、民俗学だけに現状改革の即効性を求めるには無理がある、と書く。

物の飢えは克服できたが、永い民俗生活で培ってきた心を支える論理や精神が、民俗慣行の喪失とともに失われてしまった。それを取り戻すには、学問領域を超えた協力が不可欠であり、民俗学は地味ではあるが根強い力を持っている、と続けている。

霜月祭りとは

今回お話をうかがった霜月祭り保存会の鎌倉直衛さんは、和田地区にある諏訪神社の氏子である。和田地区は、遠山谷南部の中で最大の氾濫原を持ち、かつては水田と畑地が広がっていた。和田の語源は、川が輪をなして回っていたことから名づけられたといわれている。宿場町としても栄え、商店などもあつて、「マチ」と呼ばれた。

和田は秋葉街道に面した町だ。秋葉街道は、かつて「諏訪道」と呼ばれ、諏訪信仰の道として発達。近世になって家康の庇護によって遠州秋葉山の火伏鎮護の信仰が全国に高まったことから秋葉詣での人たちの往来で賑わい、「秋葉街道」とよばれるようになった。

杖突、分杭といった地名の残る、峠越えがいくつもあつた。同時に塩の道でもあつた。湯立神事の奇祭といわれるこの祭りは、遠山の各地の神社で行なわれたことから、「遠山祭り」または遠山氏の鎮魂を祈つての要素も入っていることから「祖霊祭り」などと呼ばれ、いろいろな呼び名があつた。最近では「霜月祭り」に統一されている。

霜月祭りは、両部神道による湯



立祭り、清和天皇の貞観年間（859〜877）に宮廷で行なわれた祭事を模した湯立が、ほぼ原型のまま伝承されているといわれている。この祭りが文献に表われたのは、1812年（文化9）に本居宣長が著した『玉勝間』である。

両部神道

神仏習合思想の一つで、仏教の真言宗（密教）からの神道解釈に基づく。

密教では、宇宙は大日如来の顕現であり、大日如来を中心にした金剛界と胎藏界の両部の曼陀羅に描かれた仏菩薩を本地（ほんじ）とし、日本の神々はその垂迹（すいじゃく）と解釈した。

しかし、鎌倉時代末期から南北朝時代になると、逆に、神こそが本地であり仏は仮の姿であるとする神本仏迹説を主張する伊勢神道などが表われ、明治になって行なわれた神仏分離によって壊滅的な打撃を受けて、神道教義の主流派の地位を失った。

遠山谷はその厳しさ故に山岳宗教の修行の場として修験者も訪れ、霜月祭りにもその要素が加わっていると思われる。遠山谷は美濃、三河、遠江から信州の内陸に入り込んだ地であるが、霜月祭りと三河の花祭りは酷似しており、花祭りは熊野の修験者が伝えたといわれている。

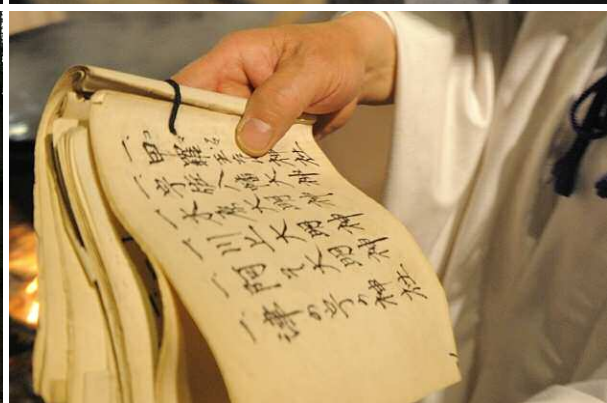
郷土館には南信濃の全部の神社の面が保管してある。これは神事で使う神聖なもので、伝統芸能の実演として舞うときにはレプリカを使うという。舞も、祭りではか舞ってはいけないものもあり、こうした決まりは厳格に守られている。

面を着けて四十二の神々においていただく「面」の段は、神事ではなく余興だというのが、夜通し行なわれる祭りの深夜のクライマックスでもある。大変印象的で、宮崎駿監督の映画「千と千尋の神隠し」のモデルになったともいわれている。

1979年（昭和54）2月に文化庁の重要無形文化財に指定されたからは、祭りも盛んになってきた。遠山谷に諏訪神社が創建されたのは、鎌倉時代の1219年（承久五）。祭りの由来は、神を崇拜する当地の先人が鎌倉に上り、湯立神楽を遠山地方に伝えたという説と、伊勢神楽の一部を伝承したという説がある。

その後、徳川幕府による改易で1618年（元和4）滅亡した遠山氏の祖霊を祀る儀式が加えられ、遠山谷の人々の再生行事の祭りとして続けられてきた。

鎌倉さんによると、人間が働いているとやがて「力」が衰えてくる。そのときに、生きる魂を甦らせるために神の力を頂く行事が再生行事だという。実際、鎌倉さん自身も保存会のメンバーも、単に伝統を守っているのではなく、霜月祭りが持つこうした「力」を意識することでモチベーションを維持しているように見受けられた。



和田の霜月祭り 式次第

- 一 湯の式
神楽歌を歌い、神様においていただく
- 二 踏みならしの舞
祭事始める場所を清める地鎮祭
- 三 湯開き
電（かまど）の五方を清めてから湯蓋を取り除く
- 四 一の湯
神様を湯の上にお迎えして、まず1回目のお湯をご馳走する
- 五 下堂祓い
げじょうばらい
扇剣の舞
- 六 二の湯
2回目のお湯をご馳走する
- 七 願はたき
祈願成就したときに、神様へのお礼を申し上げるために舞う
- 八 神子の湯
生来虚弱の者、大病にかかり、神様に願をかけ、願がなった者が神子になるための儀式
- 九 祝儀の舞
神子になった祝いの舞
- 十 鎮めの湯
特に念入りに、神様に最後のお湯を差し上げる
- 十一 やおとめ
神々の面においていただくための舞
- 十二 面
四十二の神々においていただく
- 十三 神送り
祭事においていただいた神様にお帰りいただくための申し上げ
- 十四 かす舞
神送りにて送り出したあと、まだ残っている神様に、



神事や湯立を務める禰宜（ねぎ）や村人は、水干（すいかん）という湯衣を着る。水干は、男子の平安装束の一つで、諏訪神社では古くなった織（のぼり）の生地を利用してつくられる。背中に神の字が記されて、いたく格好が良い。霜月祭りには集落ごとに四つのタイプがあり、和田タイプに属する諏訪神社では籠（かご）一つだが、下栗（しもぐり）タイプの拾五社（しゅうごしゃ）では二つ（下）。使う道具や作法も、それぞれ違っている。面の登場は「水の王」（左下）から。鎮め様とも呼ばれ、不動明王（ふどうみょうおう）のことである。



もうご馳走はカスしかない
ということを知らせる舞

十五 ひいな下し
まだ残っている神様に帰っていただき
くよう、ひいなの下ろしてしまっ

十六 金剣の舞
まだ、ひいなの残る悪い神様を
切り捨てるために舞う

鎌倉さんが語る霜月祭り

霜月祭りは火の神様によって、水の神様から頂いた清い水を沸かし、日本の八百万の神を招いて、沸かしたお湯を差し上げると同時に、祭りに来てくださった人々にも「水の王」が湯を浴びせて活力を与える、ということが主体です。また、過ぎていく年に感謝を捧げ、来る年の安全祈願をする祭りでもあるんです。

祭りの伝承が心配されるのは、どこの地方でも同じだけれど、霜月祭りは中学生ぐらいの子供たちも、目をキラキラさせて食い入るように先輩たちの舞を見ている。いずれ自分も、と思っているんでしょう。

学校でも力を入れてくれ、保存会から「地域の伝統を守ってもらいたい」と頼んだら、大勢参加してくれてね。中学でも、霜月祭りの伝承をしようと、文化祭でもやったんです。



それにしても、今は、子供が本
当に少なくなった。中学校も上村
と遠山が統合して、それでも全校
で36、37人ぐらい。林業が盛ん
だったときには、生徒が200人も
いた学校もあるんですよ。

諏訪神社の氏は、戸数は多い。
500戸ほどあります。でも、飯
田市と合併して、若い人は飯田に
勤めに行っちゃうもんで、年寄り
の一人暮らしとかが多い。

この地域の高齢化率は、50%
を超えている。二人に一人が65歳
以上。もうそういうような状況で、
働く場所がないから、仕方がない
んだけどね。飯田から1時間以上
かかるから、どうしても通うとい
うのは無理だしね。

2009年(平成21)はまたまた
日曜日だったから、地元出身の人
もずいぶん帰ってきていた。諏訪
神社の祭りは毎年12月13日と決ま
っているけれど、みんなが来られ
るようにと、土日に変えたところ
も多いね。

ここではまたまた残ったけれど、
やらなくなってしまった所もある。
若い人が減って、できなくなって
いく所もあるよ。大町の天満宮も
2009年(平成21)でおしまい。
地域の人がもうやれんようになって
たから、これで終わりだ。

天満宮では、戦後にも舞い手が
不足し、霜月祭りがいったん途絶

えたことがあった。和田の保存会
で協力して、復活したんだけど、
また続けられなくなった。

私は和田の出身で、ずっとここ
にいる。役場に勤めていました。
遠山宮司も天龍村の役場に勤めて
いた。お父さんが病気になるって、
2008年(平成20)から宮司にな
った。18代目です。

保存会は14名だったのが、20
09年(平成21)2名増えて16名。
若い人が入ってくれた。1人は高
校生。無形文化財に指定されたか
ら、保存会をつくった。少し前か
ら祭りも崩れてきているもんだから、
ちゃんと残さなきゃならないとい
って、本をつくったりした。

保存会は霜月祭りを中心にやっ
て、総代は年間の祭りをすべてや
る。

遠山郷は「神様王国」と呼ばれ
ていて、ものすごく神社の数が多
いし、お祭りの数も多い。昔は神
に頼って生きるしか、術がない、
厳しい暮らしの地域だったからじ
やないかなあ。それが、今にまで
伝えられているんだと思うよ。

諏訪神社も正月は元旦祭、2月
になると節分祭、建国祭、3月13
日に春の戸開祭、6月30日に夏越
祭、8月26、27日の御射山祭、11
月23日に新穀祭、つまり、もとの
新嘗祭、霜月祭り、年末、とたく
さんある。御柱がある年は、それ

え、それ



湯立とは、聖なる水（陰気）と火（陽気）の融合によって聖なる湯を立て、その湯気を神々に捧げ、自らも浴びる神事である。湯立で最も大切なのは、湯釜を据える竈と、その上部に吊るす湯の上飾りだ。諏訪神社は和田タイプに属し、湯の上飾りは還暦と同じ61通り。東隅に「湯男」と呼ばれる特殊な切り紙を吊るすのは、伊勢神楽の「八橋」に通ずる。

右ページは、次々と登場する面。中学生も参加していた。左ページは、豪快な湯掛けに大いに盛り上がるクライマックス。烏天狗（右ページ左下）の面をいただいた方の話によると、釜の縁に触ると火傷するが湯であれば大丈夫ということだ。次代を担う中学生たちは、熱湯を掛けるパフォーマンスや猿の舞に、先輩への敬意を込めて熱い視線を注いでいた。

も加わる。

霜月祭りは前日から準備している。前の日は準備だけ。地域によってやり方が違うし、釜の数も違う。稲荷と拾五社は一緒にやるから2回同じことをするし。

水の神をやったのは、保存会の坂本興利、金剣の舞で最後に湯師りを切ったのは針間道夫。みんな登場するときに、名前を名乗るんです。ひいな下しは、松下賢。やはり、重要な役どころは、ちゃんと練習して舞える人にやってもらう。

草鞋は、地元でつくっている人がいるから、その人から買う。結構、数があるもんでな。烏帽子はみんな自前の物だ。今は京都なんかに行つて買ってくる。装束店の井筒とか有本とか、そういう所ではないとなかなかないなあ。神社でお祭りをやるときの狩衣（平安時代以降の公家の普段着。狩のときに着用したのが始まりだが、活動的であることから普段着として定着した。現在では、神職の常装）も、京都であつらえる。

釜に入れる水は、朝、八重河内川に行つて、明神橋の少し上で汲んで来る。水の神に頂くんだね。夕べ、釜の回りを舞いながら読んでいたのは、神社の古い本から自分で写してつくる神名帳。これに全国の神様の名前が書いてあって、みんなで読み上げるようになって

っている。

お供えの餅を搗いて差し上げるところもあるけれど、うちのところでできたものを供えている。

雪はそれほど苦にはならないなあ。ここらで標高4200mぐらいなもんだから、雪は降っても年に2回ほどです。

私も70歳を過ぎましたが、好きですから、長時間の舞も苦になりません。普段から、このために運動して準備している。子供のことからの友だちで一緒に続けている人は、もういない。みんな、若い人に変わってしまった。

私は伊勢神宮に行つて、ちゃんと研修も受けてきたんだよ。何級、何級と、ちゃんとクラスがあるもんでな。毎年10月前後に例大祭があるもんで、それに行つて研修を受けていた。40歳代のころのことだよ。年休を取つて、何度も行つた。よほど、好きなんだな。

そういう夢中になつていて大人の方を見て、子供たちも「やりたいたい」と思ってくれるんじゃないかな。それにお湯をいただくというのは、自分の身体にもいいし、乾燥していると身体も弱くなるが、ああいふ湯気を浴びると生き返るような気がする。今でも再生の祭りなんだ。



都市の祭り 〈天神祭〉

浪花商人の 元気で牽引

堂島の米市場、天満の青物市場と並び、大阪の三大市場だった雑喉場の魚市場。

神宗は1781年（天明元）に創業し、のちに移った雑喉場で長く商いを続けてきた昆布・佃煮の老舗です。良い材料がなければつくりたくない、売らない、という真面目な姿勢を貫き、2008年（平成20）には一次休業を敢行。ニュースや新聞紙上でも報道され、大騒ぎされたと、尾寄彰廣さんは苦笑いします。

天神祭に文楽船、落語船を出す現代の〈旦那衆〉でもある尾寄さんは、文楽、歌舞伎、落語など上方芸能に造詣が深く、近松門左衛門が描く江戸時代の〈大坂〉研究者でもあります。水都大阪の祭りについて、尾寄さんにうかがいました。



尾寄 彰廣

おざき あきひろ

合名会社神宗代表社員

1950年生まれ。1990年より現職。8代目店主。

100隻が行き交う船渡御

天神祭をやっているのは、商売とはまったく関係ないんです。天神さんは、どちらかというと学問の神様。それと芸術の神様です。

きっかけとしては、私どもの元々の出生地が天満宮の氏地だったからです。江戸時代からずっと天神祭にはかかわってきました。

会社ぐるみで、社員も参加するようにしたのは親父の代からですね。しかし、別に会社で講を立てているわけではなく、私がどんどご船の一員というだけです。

さすがに全社員挙げて、ではないですよ、仕事もしなくちゃいけないですから……。私だけがちょっと許してもらってね。社員にも、手伝いはしてもらいますけど。

我々は間屋ですから、船で昆布を持ってきていて舟運に関係があったとか、そういうこともないんです。

しかし、天神祭っていうのはものすごいエネルギーなんです。世界最大の水上祭です。

船が100隻、観客は大体いつも100万人近いんです。それと船に乗ってる人が1万人。

いろいろな船が出ていて、乗船が申し込めるようになっていきます。一人、3万5000円ぐらいかか

るようです。まあ、そのくらいかかるんですよ本当に、船って。どんどご船はお金はいただきません。ご招待者ばかりです。

どんどご船といっても、聞き慣れない方も多いと思いますから、ご説明しましょう。

天神祭では、陸渡御に続いて船渡御が行なわれますが、川に出る船は4種類に分けられます。

まずは、御神霊を乗せた御鳳輦奉安船。船同士が行き交うときには、大阪締めと呼ばれる手打ちが交換されますが、御鳳輦奉安船が通過するときは沈黙するのがならわしです。橋の中央に正中の覆いがされるのも、御神霊を乗せた御鳳輦奉安船を見下ろすことがないようにという配慮からです。渡御中、御鳳輦船では水上祭が斎行されています。

天神様は、ずっと崇りの神様です。すからね、年に一回くらいは外に出してあげようと。それで魂を御鳳輦に移しましてね。で、お船に乗せるんですよ。菅原道真公の命日が25日ですから。

次は、催太鼓船や地車囃子船など神に仕える講社の供奉船。そして協賛団体や市民船など、神をお迎える奉拝船と、どんどご船や御迎人形船、落語船や文楽船など、自由に航行して祭りを盛り上げる列外船です。



1937年(昭和12)の船渡御では、船が200隻に達したといいますが、現在は警備の都合もあり100隻ほどに制限されています。船の動きなんかの全体の仕切りは、天満宮の中に船奉行ってのがいてるんです。で、我々はそれに従いながら航行します。

大阪商人の心意気

疫病の祭りということだと、祇園祭りなんかもそうですけれど、京の雅びに対して、大阪はやっぱり商人の迫力があります。

天神祭は、四天王寺別院の愛染祭、住吉大社の住吉祭とともに大阪三大夏祭りの一つ。6月下旬の愛染さんから始まって、7月25日の天神祭まで、約1カ月間にわたって徐々に盛り上がっていく。

夏枯れてあるでしょ。大阪商人だから、イベント起こして、夏枯れを何とかこう、盛り上げようってところもあるでしょうね。

次の天神祭に備えた準備というのは、終わった途端に始まっている。毎年同じことをやっているわけですが、反省会をします。全講社が集まります。

参加者がどれぐらいか、ちよつと把握できないんですが、多いですよ、かなり。一つの講社でも、太鼓なんて1000人くらいは、

いてるでしょう。

我々、どんどこ船は70〜80名というところですね。相当な数の人間が神社に集まります。

全部の講社の役員が出席する反省会には、非常に厳しい話が出ます。

でもそれも、みんながこう、立場が同じっていうか、悪いことを直していくっていうことで、團結します。神事ですだから、間違いないようにやらないと。

どんどこ船を漕ぐのはね、一隻40人くらいでしょうかね。漕ぐ練習とかも、毎日曜日やっています。練習は、木場。大阪の貯木場で。

練習しながら、ここのペンキが剥けてるとか、提灯のこを直そうとか、準備を兼ねて。準備や練習に、そんなに何度も何度も顔合わせていると、やっぱりチームになります。

それと金銭が伴わないのが、いい。アルバイトじゃなく、皆ボランティアでやっていますんでね。上下関係は厳しいです。親だつて子供にそんな強いこと言えない時代に、上からボロクソ言われます。

氏子の家だけでは、そんな人数がまかなえないでしょうから、講社があつてね。

講社っていうのは町衆がスポンサーになることが多いのです。古い、たとえば天満だったら海産物



とか、そういった会社が講社をつくるんです。

なくなっていくって講社もあるんですよ。今年も、やっていけないからやめさしてくださいと、一つやめられました。誰かが継いでもいいと思うんですが、どこも手を上げなかったんでしょうね、お金がかかりすぎますから。

講社を認めるか認めないかを決めるのは、講社連合会です。講社連合会の役員会で決めて、天満宮に上申するんです。

船の手配は

どんどこ船がいつごろから始まったかは、よくわからないんですが、木場の人たちが手漕ぎの伝馬船を漕いで、船渡御見物に行ったのが始まりでないかといわれています。昔は千代崎（天保ドームのそば）に天満宮の御旅所があって、船渡御はそこまで下っていましたから。

大阪も昔は水の都といわれていました、そのころは物資を運ぶのには小さな三十石船とか舢舨はしげとか、そういう船がたくさんあったんですよ。木の船がね。

舢舨はしげというのは四角い木の船なんです、それに材木載せて上流まで上がってくるとか。トラックより、たくさん物が運べますんで。

我々の若いころは、道頓堀のちよつと下は、もう材木市場。原木が長堀辺りまで浮かんでいたんですよ。

材木を運ぶのに、以前はそういう船を使っていたんですけど、今は使われなくなってきました。

それでも大阪は水路が多いんで、砂船とか台船が、まだ使われている。台船っていうのは、四角い鉄のバジジですね。大量に乗れますので、昔と比べたら規模が大きいですよ。船渡御に出る100隻の船は、こういう船を利用しています。

私なんかやり始めたころは、今のようには遊覧船とかの業者もいなかったんで、大阪市の渡船とせんが中古になって入札があったときに買いに行きました。

買ったときは、新品買ったら大変だからと思っていましたが、修繕費がかかり過ぎちゃって、今から考えたら新品買ったほうが安かったなど。

船を維持するのは、もう、苦勞くるわうばかりです。お金もかかりますし。

昔はね、京都まで三十石船を借りに行っていたんですよ。伏見から大阪へ下ってくるでしょ、そういう観光船で三十石船があったんですよ、それを借りてきてね。

で、私もまだ若かったんで、三



十石船の操船アルバイトしたりしました。私もある程度操船できまして、テレビの撮影なんかという、宇治川まで手伝いに行ってきたんですよ。手伝いに来てくれと言われたら行っていました。こちらも、借りたりするわけですから。

大阪の治水事業

高度経済成長で川が汚れたり、人の暮らしが水と離れてしまったりみたいなことがありますねえ。

治水事業も、いろいろありまして。私もやり始めたころは、よく採めましたね。大阪府とか大阪巽巽とかに、こんな所に船を止めるな、と言われたりね。

今はもう、ものすごく開かれてきて、「栈橋をつくりましょう」とか、積極的に水路を活用する方向になりました。まったく180度の転回ですね。だから、やりやすくなりました。10年ぐらい前から急に変わりました。

以前はいろいろ働きかけても、お役所ですから、例えば道頓堀の戎橋えびすにあった栈橋は大阪市の河川課のものでしたんですが、使わせてくれないんです。借りるのに、ものすごくややこしいことを要求される。

その当ても水門があったんですが、いろいろ提出して開ける時間

も調整をして。でも、水門ができる前から、こちらはお祭りやってたんやから、何で水門の許可もらわなあかんねんと。河川課ができたんが先か、天神祭が先か、どっちやねんということだね。今はもう、そんなことはないですよ。協力的です。

大阪府の治水事業というのは、もう20年位前に100%終わってるんです。ある治水事務所に、すごく良い所長さんがおられてね、その方のお蔭です。

大阪は洪水がないでしょ。東京のようにバアッとあふれるとかはない。大阪の治水事業というのは世界一なんです。すべて完璧に終わったんです。

東大阪のちよっと向こう側は、以前はよく浸かったんですよ。ところが大和川に大きなトンネルをつくり、新淀川をつくりましてね、それですべて完成したんです。

昔はもう、明治時代にも、天神橋とかがものすごく流れた。大氾濫したんですけれど、もうそれもなくりました。

だから、自慢できるでしょって。大阪の治水担当者に言うんですよ「世界一の治水都市を宣伝したらどうや」って。

しかし、予算取りがね、大阪巽巽も大阪府も治水事業の予算を取らなあかんのです。そのためにもう



いっぺんね、今までつくった護岸をつぶしてまた建て直し。とりあえず、まずは治水ありきだったけれど、次はもう、美観にきたんです。

年寄りから子供までの一体感

天神祭は内容も盛りだくさんだし、動きがあるから一度で全体な

んか見れないですよ、私でも見たことないです。

業者に依頼して、4〜5年かかってビデオ撮ったんですけどね、それが一番ダイジェスト版ですか。大阪の帝国ホテルでも、天神祭が近づくともビデオを流していると思います。

毎年、ものすごい数の観光客がみえますが、やはり、氏子というか、講の人間は、観光客とは完全に別です。何かこう、参加している気持ちになるんです。

講社っていうのは氏地の一つじゃないんですよ。船渡御をするのは講社であってね、氏子とは違うんです。講社と氏子と両方あって、氏子さんの御鳳輦とか氏子の中にある講社もあるんです。

私が一番良いと思うのはね、お祭りっていうのは世代感がないんですよ。ベテランや年寄りから、本当に子供まで一体になれるんです。

それでちゃんと受け継がれている。どこの家でもそうですけど、装束を着せると、子供が変わりますね。最近の子供って目が死んでるじゃないですか。でも大人っぽく格好よく着せてやると、ちゃんとピシッと決まりますし、勢いが出てきますね。

あんなに大きな船を、陸に宮入りさすんです、クレーンで船を吊

り上げて。昔はこんな護岸じゃなかったから、ものすごい大勢で人手で担いでした。

それで、子供どころかというのが6、7年前から始まって、まだ漕ぐ力のない子供たちでも宮入りだけ経験させる。

小さくても装束を着けて宮入りする姿は、なかなか格好が良くて、親たちが、「験がいい、験がいい」って言うんです。で、その子たちに「もうちょっと年長になってくると船に乗れるぞ」とか言って刷り込んでいくんです。実際は20歳くらいにならないと漕げないんですがね、その船は。

天神祭の魅力の一つは、音。本当に音がいいんですよ、大阪の地の音がします。

お囃子が全部違うんですよ。私も調べたわけではないんですけど、音は、たくさんありますね。音が混在するところがいいんですよ。

でも、どこも船では、音出しの練習はしません。太鼓や鉦を叩くようになったのは、黙って漕いでも息が合わないから。我々どどこ船は、船を漕ぐときにはガレージ船じゃないですけど、リズムがいるんでねえ。タイミング合わせるのにも。それで、早く漕がせたときは、鉦を早く打ったりしてね。奴隷船みたいなもんですから。



音曲は町人の素養

芝居には、「菅原伝授手習鑑」とかね、天神さんをもとにした芝居もありますでしょ。で文楽の「心中天網島」なんてのは天神さんの前に住んでましたからね、紙屋治兵衛は。

それと御迎人形船にのせる御迎人形っていうのがあって、元禄期（1688〜1704年）からは、文楽やお芝居を元にした大きな人形をつくってるんです。祭りの前に町内に飾られ、祭りになると船に高く人形を掲げて神霊を迎えたことが始まりといわれます。

落語船や文楽船は、以前は大阪の企業数社がスポンサーになっていたんですが、10年ぐらい前にみなさん撤退された。それで私などが、今は出させてもらってます。代々やってましたんで、やらざるを得んところがあるんです。私は根が好きなんので、のめり込んでおりますが。社員はやめてほしいと思ってるんじゃないですか。昨年はせんとくん船も出しました。

享保年間（1716〜1736年）に人形芝居が盛んになると、4m以上ある大型の御迎人形もつくられるようになったそうです。

1846年（弘化3）の『天満宮御神事御迎人形図会』には44体あったと書かれていますが、維新や戦禍で多くが焼けてしまい、残っているのは15体。内14体は大阪府有形民俗文化財に指定されています。歴史的に価値のあるものなので、今でももう船渡御の御迎人形船には飾られませんが、天神祭の期間中数体が展示されるから、大阪帝国ホテルとかで見ることができま。

うちのおじいさんは義太夫を、おばあさんやおばさんは地唄をやっていました。文楽を初めて見たのは、幼稚園のころ。そういう家に育ったお蔭で、文楽や歌舞伎も伝統芸能というよりか、生きたリアルなものとして身近に感じて楽しめます。

「女殺油地獄」「冥途の飛脚」「心中天網島」の解説パンフレットをつくって、公演で無料配布させてもらいました。これらのパンフレットは、みんな豊竹咲大夫師匠とお話してできたものです。大阪で商売できるのも、文楽さんのお蔭とってるんですよ。

〈天満天神繁昌亭〉は、2006年（平成18）に大阪天満宮のすぐそばにオープンしました。これを記念して、前の年の天神祭には、上方落語協会の桂三枝会長など約30人の落語家が乗船して、花火を見ながら笑いに興じるという〈天満天神繁昌船〉という船も出しました。

私のおばあさんの時代は、音曲は町人の素養だった。それを肌でわかる自分が、今のうちに書いて残しておかないと。どんどこ船も、同じ気持ちでやっているんです。

オペラやバレエは見に行くのに、「文楽や歌舞伎は敷居が高い」と思っているのが、今の日本人の大多数ではないか。尾崎さんは、幼少のころから慣れ親しんだ文楽と、そんな現代日本人の間の溝を埋め、親しんでもらうためのパンフレットを豊竹咲大夫師匠と一緒につくった。自分たちが暮らす町で繰り広げられた人間ドラマとしての解説は、文楽をぐっと身近な魅力あふれる演目してくれる。

『浪華どんどこ夜想』『男達の熱い日々』の2冊は、どんどこ船講元の夏風一嘉さんが発行人、尾崎さんが編集人となってつくられた写真集だ。



天神祭は、もう、いろんなことで芸能とかかわりがあります。



編集部の天神祭レポート

大阪天満宮が創祀されたのは、949年(天曆3)。天神祭は、その翌々年から始まった。社頭の浜から神鉦を大川(淀川)に流し、漂着した下流の地をその年限りの仮設の御旅所にする〈鉦流神事〉が行なわれ、これ以降、神様は年に一度、御旅所に渡御されることになった。渡御というのは、神様がお出かけになるという意味だ。

この渡御を慶んだ地元民が、お供の行列を仕立てたのが、天神祭の始まりだ。

渡御列は、まずは陸路で氏地を巡り、次に船に乗り換えて、船路で御旅所に向かう。それらを各々〈陸渡御〉〈船渡御〉と呼ぶ。

神職と氏子、崇敬者による地域祭礼として始まったが、江戸時代になると大坂には商人文化が花開き、天神祭も活気を帯びて、全国に知られる祭りになっていった。

仮設だった御旅所が常設になったのは、江戸時代の初頭。こうなると、御旅所周辺の住民も船を出して船渡御される神様をお迎えするようになる。さらに元禄文化が開花すると、御迎船の舳先には豪華絢爛な御迎人形を立てるようになる。人形の意匠を競って船体が飾られて、評判を呼んだ。一つ

には文楽の隆盛により、文楽の人形師が腕を奮った、ということもあろう。

1953年(昭和28)地盤沈下によって橋桁が下がり、船の航行に支障が生じたため、これまでとは逆方向にコースが変更され、天神橋付近から出発した船渡御は、大川の上流に向かうようになり、奉拝船は飛翔橋付近を出発し、下流に向かうようになった。

天神祭は7月24日の宵宮祭の神事からスタートを切る。続いて、朝の8時50分ごろ、斎船で堂島川の中程に漕ぎ出し、神童によって神鉦が流される。

このあとの陸渡御は、催太鼓によって先陣が切られ、地車囃子や獅子舞が続く。

翌25日が本宮。陸渡御列が発進する前には、境内で待機する牛や馬を見ることもできる。旧・此花町の氏子有志による福梅講は、牛曳童児を率いるが、この講の牛は、何とも美しく、見たこともないような気品にあふれている。

陸渡御列発進は午後3時半からなので、徐々に人出が増えてくる。延々と繰り広げられる陸渡御は、総勢約3000人という。真夏の炎天下に行なわれる渡御列だが、目に涼やかな緞の狩衣など、昔からの暑い夏をやり過ごす知恵がそこかしこに垣間みられるのも楽し



みの一つだ。稚児さんの列に付き添う母親の多くが、粋な着物姿であるのも風情を感じさせる。

陸渡御を終えた一団は、次々に乗船。徐々に訪れた薄暮に、提灯のあかりが映えるようになると、水面に映ったあかりがゆらゆら揺れ始める。

実は、尾崎さんが乗られているどんどこ船というのは、船渡御の列には加わらない。中之島から道頓堀まで縦横無尽に漕ぎ回り、行き交う船と、大阪締めと呼ばれる手打ちを交換する盛り上げ役、ムードメーカーなのだ。

ちなみに大阪締めというのは、打ちましょ(チヨンチヨン)もひとつせえ(チヨンチヨン)祝うて三度(チヨチヨンガチヨン)と打つ。

しかし、これとても昔は「祝うて三度」などという気取ったことは言わなかった、と言う長老は多い。「木場や市場の人間は柄の悪いのが祭りと思っているから、『よいやさでえ』で仕舞いだった」そうだ。

それでも、大阪締めは今のスタイルですっきり定着し、天神祭だけではなく証券取引所や経済界の会合などでも使われるというから、伝統の創造として受け入れていくしかないのかもしれない。

御旅所へ向かう途上で、御鳳輦奉安船の船上では船上祭が行なわれる。華やかに打ち上げられる花火も、人間のためではなく、神様に捧げられているという。

船渡御を終えて上陸した一団は、天満宮表門へと進み、フィナーレとして官入りが行なわれる。ここでも催太鼓の面々と大阪締めが交換され、賑やかさはまだまだ終わらない。

最後は神事である「還御祭」が執り行なわれ、二日間にわたる天神祭の幕が下ろされる。

とにかく出し物が多いのと、参加者数が多いので、祭りの高揚感がたつぷりと満喫できること請け合おうと思ったら、余程体力をつけておかないととても無理と感じた。参加する人も、覚悟がいるだろう。日頃から鍛えておかないと炎天下でひっくり返りそうである。見物人の数も尋常でないの、食事をするところはもちろん、花見物のために移動しようなどと、考えても、人の流れに阻まれて、思い通りにいかないものと最初から諦めておかなくては。祭り見物で橋が落ちた、という江戸時代の話が腑に落ちるような人出で、夏枯れを吹き飛ばす、浪花商人の威勢の良さ健在というところか。





社会があるから文化がある

失われゆく伝統文化〈祭り〉を守れ、といわれるととても危機感を覚えます。しかし、合田博子さんは伝統の創造なきところには、継続なし、と言います。社会生活が失われたところには文化も残り得ません。形骸化した文化を保存するのではなく、生きた文化が創造される社会を強くすることに、祭りが寄与できることはなんでしょうか。



合田 博子

ごうだ ひろこ

兵庫県立大学環境人間学部教授

1946年生まれ。東京都立大学大学院社会科学研究所博士課程単位取得中退、社会人類学博士（東京都立大学）。主な著書に『宮座と当屋の環境人類学』（風響社2010）、論文に「山・川・海をつなぐ水陸両用の神々と水の技術」（桑子敏雄編『日本文化の空間学』東信堂 所収2008）、「入が池と丹生都比売」（岡田真美子編『地域をはぐくむネットワーク』昭和堂 所収2006）、「森を守る法・森を破壊する法」（橋本政良編『環境歴史学の探求』岩田書院 所収2005）ほか

開かれて閉ざされる

村の神社は、いわゆる産土神^{うぶすま}で、神主さんもないことが多いので、祭りのときに働くお当番が当屋（頭屋）です。

当屋の仕事は大きく分けて二つあります。場合によっては、神主さん、宗教者の代わりを務めます。地域や時代によって差がありますが、長い所では1年間、少なくとも1カ月は水ごりをするんです。海のそばだったら、潮水で。1カ月から1週間前になると、夫婦の営みも断って。

もう一つは直会^{なおらい}。祭りのあとには、必ず神との共食^{なむらひ}があり、そのご馳走を全部まかされたのです。村落共同体の維持には、集会と神聖な慣行が大きな意味を持ちます。祭りは、村の一層の共同と合意を図るために有効な手段だったのです。

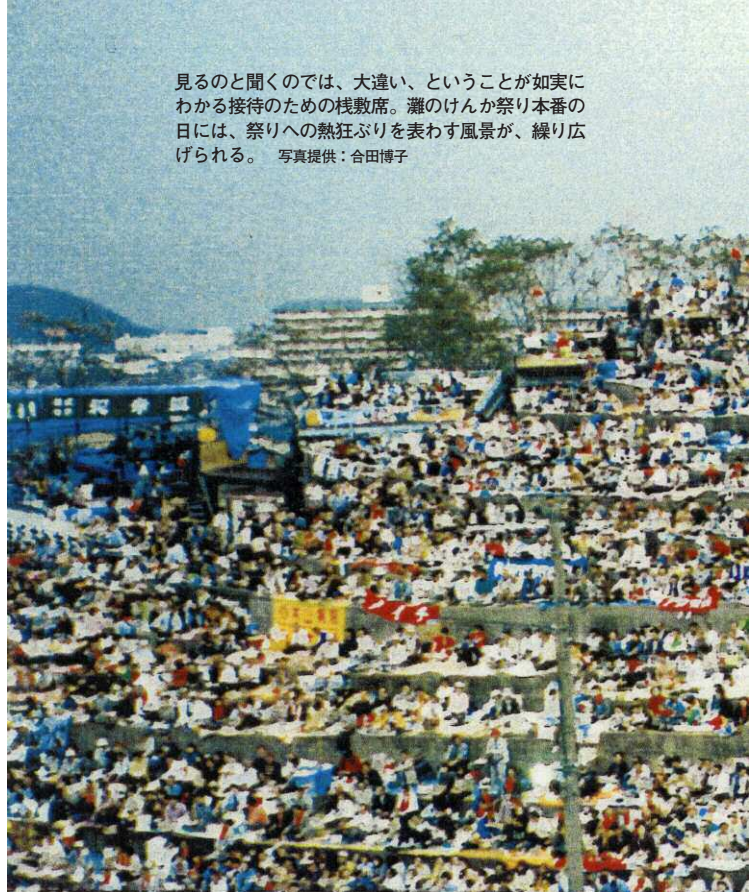
当屋に当たることは、名誉なことであると同時に、経済的に大変な負担です。それでも、その負担に耐えられる家であることを見せるためにも、引き受けていました。今でも都市のご真ん中に、当屋が続いている所があります。姫路の北平野という所で、姫路獨協大

学のそばです。浜のほうから見ると少し高くなった辺りに北平野があつて、薪で炊事をした時代には、夕餉^{ゆげ}の煙が上がるのが見えたそうです。ところが祭りの日は当屋の家からしか、煙が上らない。朝昼、晩と40戸からの全員に食事を振る舞ったといえますから。

ですから、「開かれて閉ざされる」と言いましたけれど、同じ村人でもある程度の力のある人でなければ、当屋は引き受けられないのです。

ですから宮座にも上層村人しか当屋になれない〈株座〉制のところがありました。逆に村人であれ

見るのと聞くのでは、大違い、ということが如実にわかる接待のための棧敷席。灘のけんか祭り本番の日には、祭りへの熱狂ぶりを表わす風景が、繰り広げられる。 写真提供：合田博子



ば、誰もが当屋になれる〈村座〉もありました。〈株座〉が先にあって、徐々に開かれていって〈村座〉になったのだらう、という説が一般的です。

当屋を経験した人は、村人として一人前と認められるので、やがて村長になったりします。村長になるような人が当屋に選ばれるという、逆の場合もあったでしょう。ただ、単にお金がいっぱいあるから当屋になれる、というものではないのです。当屋になるには、いろいろ条件があるのです。

専門用語に〈儀礼階梯制〉という言葉がありますが、段階を少しずつ上がっていった、地域の中で

旦那衆として認められていくのです。これは、何も農村に限らず、都市の祇園祭りも同じです。責任と義務を果たすことができる、という資質を公に見せていったんですね。

特定の人がずっとやるわけではないので、一面だけ見れば、持ち回りのように見えますが、そこに〈開かれて閉ざされる〉原理が働いています。持ち回りというのは、〈開かれている〉一つの形ではあるのです。それは〈村座〉の在り方に表われています。

しかし、もっと前の段階には、村人にも格があつて、嫌な言葉ですが水呑百姓とかいわれた階層が

あつた。その人たちが、もしも当屋になりたいと思つてもできなかつたはずだ。

〈内部で資格を持つ者の間にある平等性〉は、外部に対する閉鎖性でもあります。これは、より広域での〈市場の論理〉に抵触するのですが、そこに〈宗教的なるもの〉を介入させる。〈宗教的なるもの〉は、私権ではなく神につながるもので、閉鎖性が破られる、と考えられます。

かつて存在したイエの家格などは、封建的と否定されて平等になつていったように見えます。

しかし、今でも基本的には本家の長男が資格を持つている。分家ができてその長男にも資格を与える場合もありますが、増えては困るといふ所は、宮座を複数つづけています。

つまり、本家の長男だけが所属する宮座と、分家しか所属できない宮座です。長男、という条件はいつでもついて回るのですけれど、そして分家のグループには別に何々座、という新しい名前をつけて、お手伝いのようなことをやらせています。やはり、そこには序列ができます。ですから、開けているように見えて、構成員を選んでいる。

組織って何でもそうですよね。フェミニズムの団体だって最初は

女性しか入れない、黒人解放運動も最初は黒人しか入れない。入る人の条件を狭めていますよね。それがやがて世間に認められるようになる、「こんなことをしているたんじゃ、世間に認められない」といつて開いていく。

だから、いきなり広げるということはできなくて、その組織がきちつとするまでは閉鎖的。でも閉鎖的のままだったら広がっていかないから、開いていく。しかし、ある時期にまた、必要に迫られて閉じていく。実はオープンに見える〈村座〉にも、本当に平等な〈村座〉というのはいんですよ。

中核村人であつた家でも、未亡人になつたとか、後継者がいないとかの場合は、「今回は休みね」とか「半人前」と言われて順番を飛ばされます。これが続くと、本当に弾かれて、当屋から抜かれることもあります。

国内に目を向けるきっかけ

私は兵庫県立大学の環境人間学部で、環境人類学を担当しています。

もともとは文化人類学者として、フィリピンとかインドネシア、ベトナムを研究していたのです。社会組織の研究とか、結婚のルールなどを調べていました。その東南アジアの研究の中で、

地元には独自の慣習法があることを知りました。その人たちにはルールがあつて、ちゃんとした法律にはなっていないけれど、慣習法となつている。暮らしの中の慣習法というのは、いわば不文律なわけです。

日本の祭りに興味を持ったきっかけは、兵庫県立大学の前身のうちの一校、姫路工業大学に1998年(平成10)環境人間学部が設立されて、そこに着任したことにあります。

兵庫県立大学というのは2004年(平成16)に神戸商科大学、姫路工業大学、兵庫県立看護大学の兵庫県立の3大学を統合して誕生した大学なのです。

フィールドワークというのは人類学なら当たり前ですが、そうでない学部で必修にしている学部というのは、当時はなかった。私は文化人類学者だから、そこを担当させられたんですね。でも、毎年必修だから、大勢の学生を海外に引き連れて行くには無理がある。それで国内でできる所を探しました。

自分でも国内、それも本州は全然やっていなかったんですが、急遽、播磨をフィールドにしました。そして、祭りをとっかかりにするに入りやすいから、まずは祭りから入ろうと考えました。文化人類



国土地理院基盤地図情報（縮尺レベル25000）「兵庫」及び、国土交通省国土数値情報「道路データ（平成7年）、鉄道データ（平成20年）」より編集部で作図

学というよりも民俗学ですかね。でも祭り自体を研究するというよりは、現代社会全体を見ようとしたところが文化人類学的です。

2年生の必修だったのですが、1年は暇でしたから、まずは自分が先に研究しておこう、と県に申請して「自治会組織と現代の地域集団及び祭り集団との関係」というようなことを研究テーマに据えました。

それで、姫路の灘のけんか祭りの調査をやりました。ここは播磨の気質が色濃い所で、ボンボン会話が弾んで面白い。私はもともと東京出身で早口なので、播磨のボンボン言う人と気性が合ったようです。

姫路・灘のけんか祭り

農業は衰退しても、青年団や消防団が継続する地域はあります。しかし、続いてはいるものの無理矢理やらされている、という感覚で、祭りも隔年になってしまった。そういう地域と、灘のけんか祭りは、どこが違うんでしょうか。ダメになっている祭りもあるのに、なんでここだけこんなに盛り上がるのか、と思いますよね。やはり屋台合わせという見せ場をつくったことが大きいかもしれません。以前は、余興みたいなこともたくさんあったんですよ。そういう余興がまだ残っている地域も

あって、そこでは女の人も祭りに参加できます。しかし、灘ではそういう余興をカットしていった、男っぽい、非常に荒々しい祭りに特化していった。それは明治以降のことといえます。

この地域の祭りは、10月の初旬から始まって、最後は23日の綱干の魚吹八幡神社で終わるまで次々と行なわれます。でも、一番有名なのが、姫路市の南東部に位置する旧7カ村で行なわれている灘のけんか祭りなんです。

祭りの日には、公務員だろうがサラリーマンだろうが、みんな公休を取るんです。盆も正月も帰ってこなくても、祭りには帰ってこいよ、と。

「もし、祭りに帰ってこなかったらスゴイ噂が流れる」と言うんですね。帰ってこれない所にいる、と言われるそうです。外国かな、と思ったのですがそうではなく、刑務所にいると思われるそうです。祭りにかかわるきつかけになるのは、子供です。子供の学区と神社の範囲が一緒なんです。灘中学校区というのは、江戸時代の村だと7カ村に相当していて、それが松原八幡神社の範囲。ここは旧・社格の郷社で明治後も県社になった、結構大きな神社なんです。その7カ村が旧・東山とか旧・松原とか、いまだに昔の名前で出

ているのです。歌謡曲に、そんな題名の歌がありましたよね。

現代自治会組織でありながら、祭りの日には江戸時代の氏子集団、村落組織が、顕在化するわけです。

灘のけんか祭りの場合は、特殊な例かもしれません。農村と違って、祭り以外でその集落が結びつく必然性がありませんから。しかし、祭りがあるお蔭で、各家の家族編成とか、普通では細かく知ることができないことまで、わかります。ですから、NPO活動などへの協力も、祭りをきつかけにして積極的になっているように思います。

祭りは10月14、15日で必ずしも土日にならないのですが、だからといって祭りの日にちを変えたりはしていません。ウィークデイに当たったときには、小中学校は休みになります。高校は休みにならないのですが、灘地区では、「あの地区は祭りになると東から西にインフルエンザが流行するね」と言われています。高校生は、もう神輿の大事な担ぎ手なので、先生も黙認というか、できるだけ中間テストの時期に当たらないように、とか、灘では学校も祭りに協力しています。

自然にそうなっていく。小中学生は、16日の朝は、始業を少し遅らせてゴミ拾いをしています。

灘地区の自治会は、祭りが近く村入り」とあって「酒1升持ってきた」と書いてあったりします。今、宮座・当屋はないですが、自治会でも祭りや密接にかかわっているからなのか、古いという風習が残っている。普通の自治会ではそこまでしないとと思うんですが、逆にいえば、今の自治会には「魅力がないから入らない」と言う人もいます。だから、そこまでされても、入りたくなるような魅力が自治会が持っているということ、これも祭りの恩恵でしょう。

水をもらった感謝

中世の水帳みづぢょうというものが残っていて、どれだけ他所よその地区から水をもらったかが、きちんと記録されています。それに対しては米何俵かをお礼に贈っているのですが、そういう具体的、経済のお礼だけではなくて、祭りのときに接待しているんですね。

灘でいまだに旧村の結束が固いのは、こういう歴史的な積み重ねが生きているからかもしれません。私がそれを類推できたのは、滋賀県の琵琶湖周辺の宮座の研究が



遠山郷霜月祭り／〈諏訪神社〉での直会。ここ共食の場が、コミュニティの絆を強めるのだ。

ヒントになったからです。

灘でも地域の人がちゃんと研究して、自治会発行の本まで出ていて。そのお蔭で私も中世のことがわかったんです。

水の利用の範囲と祭りの当番地域が、実は重なっているというところは、そこから発見しました。井戸のある所から神水を汲んだとか、当番から外れた地域からも馬を出したとか、何らかの協力をしてもらっています。そこは現在の祭りの当番地区ではないですが、水を媒介とした歴史的つながりがあった所なのです。

水の慣行というのは、水源に近

い地域が一番力を持っていて水を

先に取ってしまうわけではありませんが。特に、井堰や溜め池といった人工構造物によって水を得る場合、水源に近い地域だけでは、それが維持できないんです。ですから、それにお金を出す人が現われる。そうすると、水源であつてもそつちに水がいけない場合もある。土地の地形的な上下関係が、そのまま社会的な上下関係にはなり得ないんですね。

そういう事情を反映して、水をもらったり、何らかの恩恵をこうむった人たちが、もらった人に対して接待している。

彼らは接待の場というのを設けていて、昔はお旅所といって、神社から少し歩いて行った所に段々畑があつて、コロシアムみたいななっています。江戸時代から栈敷があつたかどうかはわかりませんが、呼んできて接待している所。その前のすり鉢状になった所で、一番の見せ場である屋台のすり合わせというのをやります。

元はみかん畑か何かだったようですが、今はもう、作物はつくらないで、設けた栈敷席の畳何枚かのスペースを、1年1回のために何十万円か出して借りるんです。

みんな、そこを借りたいんです。数に限りがあるから、持っている人に余程のことがないと、新たに借りることもできません。接待というところで、信州の御柱祭りとか共通するところもありますね。

最近には神社の境内にも野球観戦のようにボックス席をつくって売り始めました。1席5万円で何十倍、という競争率みたいです。すぐに売り切れちゃう。実際、こういう席でない、見れません。危険です。何年かに一度は死人も出るほどです。

今は県知事とか市長とか、芸能人を呼んだりするのですが、当時だつて取引上のお客はいるはずなのに、そういう経済的つながりがある人たちだけではなく、水で

恩恵を受けた相手にお礼をします。

祈願に代わる地域愛

もう農業はやっていないし、ここで神様にちゃんとおかないと来年収穫が望めない、なんていうことは、現代人はもう考えていません。実は、自分たちがやっているのは何神社の祭りがさえ、知らない人もいます。さすがに神社の名前は知っているけれど、「神様はなんですか」と聞いても、「知らん」と言う人が多いほど。

では、その人たちは何を求めて祭りに参加しているのでしょうか。私は、その人たちが地域を愛している、地域を住みやすくしたい、と思う気持ちで動いているのだと思っています。

そして子供たちに、「ここに住んでよかった」と思ってもらいたい。どんな他所に出て行っても、祭りになったら帰ってくるような場所であつてほしい。本当のふるさとだ、と。

そのふるさと感覚が持てて、地元で生きていく人間が同じ地域の人間であるというつながる気持ちを、せめて祭りの日には分かち合いたい、と思っている。

非日常（ハレ）のときだからこそ、それを感じていると思います。

しかし、それが単に守るためだけに形だけやっていたんでは、そういう気持ちも出てこないでしょう。祭りの魅力は一言では言えませんが、あるおじさんに密着して取材していたときに、「普段は、こんにちはって言って終わりだけれど、祭りの日はもつとゆっくり話ができうれしいじゃないの」と言ってくれました。そういうことを感じているんですよ。

民俗学や文化人類学でも、祭りは地域を統合する機能がある、といわれていますが、現代でもそういう働きは続いています。

現代の組織は、意識を持っていても入れて、いつでも抜けられる集団になる傾向があります。社会学で、アンシエーションと呼ぶ組織のことです。

そういう中では、責任感と目的意識を持った、非常に限られた上立つ人たちが会を運営している。下のほうの構成員は、義務を課すと窮屈が辞めてしまいきます。ですからNPO法人などをつくつても、みんなが目的意識を共有しないと、なかなか活動が活発にならない。

ただ、人が用意したものを消費者的に享受する楽しみではなくて、汗を流して、クリエイティブなことをするというのは、やはり楽しいはずですよ。



大阪・天神祭／商店街を神輿が練り歩く。ここで培われた人と人、人と地域の結びつきは強い。

祭りはある意味、とても面倒なことを強いられるけれど、かつてはそれでつながっていきなかつたり、地域の山が利用できなかったり、流域の水路を利用できなかったり、地域の中で生きていけなかつたり、現実があった。草刈りは面倒だけれど、その草は貴重な肥料になったわけ

です。ですから義務と権利の関係が、絶妙なバランスであったと思うのです。そういう意味の輪っかができていた。リサイクルじゃなくてサイクルがね。日本では「職の体系」(上から下へ次々と土地の管理などを請け負わせていく中世以来の体制)が統治の論理の根本

にあったから、西欧でいわれるような commons の悲劇は起こりません。入会地はローカル commons として、循環の仕組みが構築されていたのです。モノも行為も輪っかになっていった、そのサイクルが断ち切られた現代で、何をすれば新しいサイクルができるのか。そのヒントが祭りに隠れているような気がしています。

社会化する機能

もう一つは社会化。ソーシャリゼーション。子供が大人になっていく過程で、どうやって社会に適応させていくかという問題ですね。赤ちゃんのときは条件反射のようなものですが、その次にしつけ、学校教育、社会教育・職業教育といった段階があって、その場、その時に応じて社会化していく。

自分たちが生まれた社会の中で、自然に身につけていくので、その社会の人間になれるわけです。今は家庭も崩壊していきなり、学校教育に頼れないような状況にありますけれど、祭りのときは社会化がスムーズに行なわれるんですね。私が調査を始めた十数年前は、茶髪とかロングが流行り始めたころでした。高校を卒業して大学に進む子も入れば、職人さんになる子

もいる中で、中学のときにお友達であったも、普段はなかなか話す機会もなくなっていく。しかし、祭りのときは、彼らが一緒になって神輿を担ぐんですよ。茶髪の子に親がやめると言ってもやめないけれど、祭りの長老が「やっぱ祭り」のときは角刈りにしよう」と言ったり、たとえ言わなくても自発的に角刈りにしてくる。

それが岸和田のほうでも同じ現象が起こっているようで、「だんじりカット」と呼ばれています。普段は暴走族に入っているような男の子でも、力持ちだったり、面倒見がよかつたり、そういう場の仕切りに優れていたりして、見直されたりしています。彼らも、普段は発揮する場がないのですが、祭りのときにはその能力が光るんです。逆に有名大学に行つたり、一流企業に入った人でも、そういうことができなかったりね。

《連中》という特別のグループがあつて、大人になってからも友人関係をずっと続けています。ちゃんと続いている良い祭りには、必ず、こういう人間関係があります。

祭りも伝統の創造

親戚とかたくさん来て、自分の家に入りきれないから、みんな旅

館に泊まるんだそうです。だから、毎年、予約で埋まっています。調査のために泊まろうとした旅館には、最初は断られたんです。それで布団部屋でもいいから、と言って無理に泊めてもらったんですが、お風呂もなければご飯も出ないよ、と言われて。

ここはもう、観光客なんか、相手にしている場合じゃないんですよ。確かに観光客は来ますけれど、地元の人との知合いがいないと、本当の見せ場とか面白さは理解できないような祭りなんです。チェーンのコンビニとかは開いていますが、商店街、全部しまっちゃいますからね。

観光客の多さでいうと、祇園祭りなどが典型ですね。しかし、あれも商店街のイベントとしてやっているのではなく、やはり祭りとして地域の氏子である商店街の人がかかわっているのではないのでしょうか。

イベントであってもそのときに感じられる高揚感は、祭りと同じだと思いますが、私はイベントと祭りは、別だと思えます。〇〇サンバ祭りとか、〇〇阿波踊りとか。

本場の阿波の阿波踊りはいいんですよ。一太郎をつくった株式会社社ジャストシステムがわざわざウターンしてね、新入社員は連で踊

るんだそうですね。そういう郷土愛がある。

もちろん出発点はイベントであっても、それが引き継がれて歴史になることはあると思います。○阿波踊りが果たして50年間続くかどうか。

では、イベントと祭りの線引きはどこにあるのでしょうか。祭りが既に神事としての意味を持たなくなった現在、祭りが持つイベントとは違う力というのは、なんなのでしょうか。

神事が本来持っていた意味、農業だったり、漁業だったり、生業と結びついていたから保たれていた意味みたいなものが、現代においてどう変換されていくのか。それはやはり地域愛、郷土愛なのかもしれません。イベントであってもそういう気持ちが想起されて、毎年来たいと思わせるようになって、祭りと呼んでもいいかもしれません。

ですから、やはり祭りというのでも、古いことをただ守っていたんじゃないダメなんです。社会学や歴史学でもいわれていることですが、「伝統の創造」ということがないと、続かない。伝統もクリエイティブの部分を革新していかなくては、守られない。

たとえ室町であろうが、平安であろうが、その時代の若い人は、

その時代なりの革新的な考えを持つのですから、絶えず新しくなっていくんです。それを否定して、頑なに古いものを守ろうとした場合、それらは滅びていきます。

今、生きている祭りというのは、若い子供たちが（祭りデビュー）を待っている祭りです。

大人たちが伝統だからとか、文化財で守らなくちゃいけないからとかではなく、自分たちが楽しいから参加する、という姿を見て、子供たちが自分たちもやりたい、と憧れるんですね。

社会があつて文化がある

祭りの役割を諄々（じゅんじゅん）とやってきた人が、「この人は仕事もできる常識もある」と他から認められるようになって本物の村人として受け入れられていく。そういう人たちが、合議制に則った村の政治をやっていたんですね。

時代が下がってくると、小さな講が、弁天様や瀬織津姫を信仰して溜め池や川の取水口などを祀るようになるんですが、本来は地域全体を統べる行政としての村が、全体の一部として水神様を祀っていたはずなんです。

九州大学の河川工学者鳥谷幸宏さんからうかがったんですが、佐賀藩の鍋島家は、治水のこと、ど

こにどういう風に溜め池をつくったとか、水害の状況なんかもくわしく記録しているそうです。

鳥谷さんはかつて河川事務所の所長として、具体的な水利の技術とか、現状の川の在り方を聞きに行っていたながら、気づかないうちに民俗学的なフィールドワークをしちゃっていたんです。それは民俗学の調査でもなく、河川工学の調査でもなく、いわゆる環境学みたいなものだったわけです。

私は近年、鳥谷さん、東京工業大学の桑子敏雄さん（環境哲学、兵庫県立大学の岡田真美子さん（環境宗教学）とチームを組んで、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。領域を超えてつなぐこと

で、同じ情報からでも今まで見えなかったことが見えてきました。この4人は他の仲間とも一緒に、まるで旅の一座のメンバーのように活動しているんですが、鳥谷さんも「今までは、地元の話の中に神様のことが出てきても、その神様がどういう位置づけにあるのか、わからなかった。でも、この一座で話していくうちに、そのことが重大な意味を持っていることに気づいた」と言っています。

文化人類学では、地元の情報提供者のことを、インフォーマントというんですが、地元の人是一次インフォーマントで、鳥谷さんは私の二次インフォーマントになってくれたんです。それで、一緒に

また現地を訪れたり。このような領域を超えた視点が、これからの社会に新たな発見、示唆を与えられるような気がしています。民俗学というのでも、本来、祭りなどの民俗を通して、現代に示唆を与えるものだと思います。過去のことを掘り下げるところで止まってしまつてはいけないのです。

近年、祭りは保存すべきものとして、また文化財として保護されています。補助金も出るし、地元の人たちは改めて価値を再発見する。しかし、それはお仕着せのものにしか過ぎません。

地域というのは社会集団なんです。しかし、ともすると、「社会」が抜け落ちて「文化」だけが一人歩きする。アメリカや中国、ベトナムなんかでも少数民族の文化を守ろうとして、国も補助金を出して文化が続くことを奨励します。しかし、その人たちのコミュニティ、社会組織まで復活しちゃうと分離独立しちゃうとか、デモになるとかいつて、制限する。

祭りは芸能としてごく援助するの。しかし、文化だけ残ることなんてあり得ない。その人たちの社会が生きていないと、文化や祭りも続かないのです。



2010年12月に、福岡県古賀市で行なわれた〈ふるさと見分けin古賀市〉に参加した合田博子さん。フットワーク軽く、フィールドワークショップが繰り広げられた。





守り伝えるための 〈お弓〉の仕組み

高浜市無形文化財 吉浜八幡社 射放弓 しゃほうきゅう

毛受 尚志さん

めんじょう たかし

吉浜八幡社氏子総代

1941年愛知県高浜市生まれ。2010年より現職

第30回 水の文化楽習 実践取材



祭りが地域の文化を継承したり、コミュニティづくりに役立つのではないかと、という期待は大きい。しかし、本場にそうなのか。人口構成や若者気質の変化、また氏子感覚の喪失といったように、人の暮らしを取り巻く環境が変わっている以上、祭りの機能も変化して当然だ。

愛知県高浜市で弓の神事が350年余りも続いていると聞き、吉浜八幡社氏子総代の毛受尚志さんにお話をうかがってみた。

余興と神事

八幡社の総本社は、大分市の宇佐八幡宮で、奈良時代から仏教保護の神として「八幡大菩薩」の神号が与えられた。また、弓矢神、武神として源氏の氏神となり、武家に崇拜されたことなどから、全国に多く勧請され、全国で一番多い神社といわれ、その数約2万社ともいわれている。

弓の神事「射放弓」を中心にお話をうかがったのだが、吉浜八幡社の祭りでは、「おまん」という駆け馬と「巫女舞」も行なわれる。

部外者にとっては区別がつかず、話を進めていく内に毛受さんから、「射放弓」と「巫女舞」は神事です。が「おまん」は余興ですから、

という言葉が飛び出した。

「馬が関連する祭礼行事は、全国的にあると思われませんが、「おまん」とも始めは馬を曳いて歩く飾り馬からスタートしたようです。

高浜市内、隣の刈谷市、東浦町、碧南市など、衣浦湾の周辺地域で行なわれているようで、祭礼の日にはあまり重ならないようになっており、馬が足りないというようなことは聞いておりません。

馬はね、市内でも「おまん」のために、個人で飼っている方が何軒かありまして、そこから有料でお借りしております」

高浜の地場産業として瓦生産があり、明治期には運送用に馬がたくさん飼われていたことから、「おまん」が盛んになったという。また、謂れはわからないが、花車を曳くのと一緒に歩く役員（天目付）が太く編んだ縄を背負っており、これなども瓦産業の名残を思わせる。縄は、瓦のように割れ易いものの緩衝材兼梱包材だったからだ。

飾って曳いて歩くだけだったが、段々と年代が下がるにつれて、駆け馬になった。馬場の中を馬がぐるりと走るのに、人間が並走しながら飛びつくものだ。足の速い競走馬になると、取りついて走るのが大変だし、怪我人も出るが、男の度胸試し、足自慢のようなもの



右ページ：2010年の大祭はあいにくの雨。本来は屋外で行なわれる〈お弓〉の奉納は、社殿内で厳粛に執り行なわれた。一人が畳2枚の上で作法を行なっている間、もう一人は立ったまままじっと待つ。紋付袴姿の先生（師範）が付き添う後ろに、見守っているOBの姿が見える。
左ページ：馬場を疾走する馬に、駆け寄りながら取りつく〈おまんこ〉。きれいに飾られた馬が何頭も登場し、子供たちにも大人気の余興だ。

で人気がある。

「おまんこ」は祭礼の余興であり、歴史はそれほどなく、ほかの行事でもよかったかもしれませんが、今は、市内の各神社の祭礼の余興としてしっかりと定着しています。

射放弓は神事として長い歴史を持つっており、そこが少し違うと思われます」

弓と聞いて思い浮かぶのは

射放弓とは聞き慣れない言葉だが、弓ですぐに思い浮かぶのが流鏑馬だ。実戦的弓術の一つとして平安時代から存在したといわれている。武士階級の台頭で、勇猛な弓馬礼法が重んじられるようになったが、江戸時代に入ると、戦う機会を失った武士たちにとって、武芸は嗜みとなっていくのである。

相撲で行なわれる弓取り式も印象が強い。これも平安時代に、勝者の立役者が矢を背負って舞ったことから始まったといわれている。場所中に毎日行なうようになったのは1952年（昭和27）5月場所から。これも元々は千秋楽にのみ行なわれ、この場所最後の勝者を称えて行なうものだったため、結びの一番が引き分けや痛み分けの場合、当然ながら行なわなかった。前述の流鏑馬は、明治維新、第

二次世界大戦、敗戦によるGHQ（連合国最高司令官総司令部）の占領政策と、度重なる危機を乗り越え、現在は観光の目玉となっている。

このように謂れを調べてみると、長い間原型のまま継承されているようにみえて、最近になってアレンジされていることがわかる。

戦いに出なくとも、疫病や飢饉などで簡単に死んでしまった当時の人間が、神仏に祈る思いは今より強かったはずだ。弓馬礼法を奉納するというのが武運を願ったり、勝利を感謝する気持ちから、神事として扱われるようになったことは想像に難くない。

射放弓は作法

しかし、射放弓は流鏑馬のように、矢の的を射当てることを主眼としない。篠竹と和紙でつくられた矢尻のない矢を、天空高く、射放つのである。

高浜市吉浜には、八幡社と神明社の2社の神社があって、それぞれ上地区、下地区の氏神様として親しまれてきた。射放弓も2社で行なわれ、敬いの気持ちを込めて〈お弓〉と呼ばれている。

射放弓の名前は、神明社に今も残るお墨付き令書に由来する。そこには、

神明於社射放弓



可令授与者也

とあり、へしやほうきゆう」と音読みしているが、意味からするとへいはなしの、ゆみ」であろう。

吉浜八幡社には記録として残るものはないが、ほとんど同じ神事が続けられてきたので、ルーツは同じと考えられている。

1976年(昭和51)に射放弓が高浜市文化財の第一号に認定された際に、当時の吉浜公民館館長故・杉浦林造さんは、射放弓について念入りに調査を行なった。その結果、弓といっても的を射抜くのではない射放しの弓の神事は、ほかには見られない珍しいものだという。

〈お弓〉奉納者は〈お弓役〉と呼ばれ、2社からそれぞれ2名ずつの青年が選出される。

「弓道の心得があるとか、そういうことではありません。弓道とは全然違うものだから。」

弓道は、要は的を射ればいいのですが、射放弓は作法をね、延々とやるのです。お弓の作法を。それを延々とやって、最後に2回、矢を射って終わるのです。作法だけで40分くらいかかります。2本射るために40分の作法があるので「す」と毛受さん。

2本の矢を射るために40分の作法がある、と聞いても、なかなかピンとこない。2名の〈お弓役〉には前役と後役とがあって、〈お弓役〉の一人が奉納している間、もう片方の人は微動だにせず立っていないわけではない。

それだけでも相当つらそうなのだが、〈お弓役〉経験者の話を聞くと、作法自体も肉体的に大変つらく、途中で逃げ出したくなるほどのものだ、とのこと。

いったい、どんな作法があるか、ますます興味が湧いてくる。

ちなみに〈お弓役〉は、前の晩からお宿と呼ばれるお当番の家に泊まり、夜中の2時ごろ起きて風呂に入り身を清める。支度をしたらまずはお宿の前で二人がそれぞれ2本の矢を射る。

「一度で終わるものではなく、そのあとも鳥居の所、境内でも射ま



右3枚：弓の扱いができるように左肩の袴を外し、丁寧に畳み込む師範。たった2本の矢を射るのに40分をかけて行なうわけだが、一つひとつの動作は例えて言えば太極拳のようなスローテンポ。この日は社殿内なので、実際には矢は放たない。

上下：腹に力が込められるように、鴨居にしがみついても振り回されるぐらいの勢いで、晒しをきっちり巻く。何年か繰り返されているうちに、畳の目がすっかり縫（よ）れてしまっていた。

2010年の〈お弓役〉、左が兄の坂本和也さん、右が弟の直敏さん。



す。2本射るのを1回として、4回射るのです。身を清めるのも今は風呂ですが、昔は西の浜に行き、海水で禊みそぎをしたそうです」

吉見喜左衛門のお墨付き

吉浜の2社では、そもそも湯立ゆたて祭りが行なわれていた。それが1659年（万治2）八幡社、神明社両社の神官だった吉見喜左衛門によって先のお墨付きが与えられて以降、「馬三疋に弓二張をもって祭りとする」ように改められた。しかし、毛受さんによると、

「古老の話では、昭和初期まで湯立が行なわれていたようです。八幡社には1799年（寛政11）三州吉浜村と銘がある御湯釜が残されています」

とのこと。大釜に沸かした湯の

中に饌米せんまいを入れて、その様子や沸いた湯の鳴音によって、一年の農作物の出来やその他の吉凶を占ったという。

「馬三疋に弓二張」によって行なわれる神事こそが、定法であると定められたのは、理由があった。神明社はかつては太神宮と呼ばれて、通称〈古宮〉と呼ばれている吉浜町南屋敷の地に祀られていたのだが、1658年（万治元）火事になって社殿が焼失してしまったため、現在地に遷宮している。この遷宮を期として、吉見喜左衛門が射放弓のお墨付きを与えているのだ。

吉見喜左衛門は奈良から来たといわれる神官で、紀州藩の初代藩主 徳川頼宣よしのぶのお国替えに伴って、吉浜を離れたとされる。2社の神官は喜左衛門の弟、太郎左衛門が継いでいたが、火事になったために兄の喜左衛門が和歌山から助っ人に帰ってきたというわけだ。

市の無形文化財に認定された折杉浦さんは吉見喜左衛門についてもくわしく調べようと、わざわざ和歌山まで足を運んでいる。その結果、吉浜の吉見家は残念ながら断絶しているが、紀州吉見家は続いていることが、突き止められた。吉見喜左衛門がどのような作法や所作を命じたかはわからないが、〈お弓〉奉納者は、翌年師範とな



右端：お弓を拾った人は、その年1年無病息災となるため、雨のために放たれなかった弓を天に射る。上：無事、奉納を終えて、緊張から解き放たれた二人。「自分のとき以上に緊張する」というのは、OBのみなさん。難しい動作のタイミングがわかっているだけに、固唾を呑んで見守る。



って弟子に伝授していくので、間違いなく伝承されているはずだという。

「八幡社のすぐ下は、海だったんですよ。神社の一角に貝塚がありましたね、県の文化財課で調査しましたが、弥生時代から人は住んでいたようです。

ここは昔から農業と漁業だけです。田んぼも明治用水が開通するまでは少なく、畑作です。

お米が採れるようになったのは、海を埋めて新田をつくったから。服部新田だとか流作新田だとかの地名がつけられました」

と毛受さんがいうように、当時の氏子たちは農民や漁民であったのだろう。袴かまもろを着け大小の刀を差し、弓矢を携えて神前に「お弓」を奉納する、と聞いただけで、村人がどんなに驚き、誇りに思ったことか、と杉浦さんは指摘している。それは、「お弓」が古くから非常に大切に扱われてきたことからもうかがえる。

「江戸時代には、農民には帯刀はおろか、袴を着ることも許されなかったのです。それを特別に認めさせた聞いています」

氏神様が火事で焼失してしまっただという心の痛手を、「お弓」の奉納という形で解消させようとしたとしたら、吉見喜左衛門はただ者ではない人物といえよう。

つらいからこそ

昔は、村の庄屋、組頭、それに「おちょう番（その年の祭礼一切を仕切る重要な役柄）」などによって、「お弓役」を推薦していた。

「今は、原則は立候補制。広報で回覧して手を上げてもらうのですが、立候補がない場合は射放弓保存会役員が合議制で選出し、こちらから頼みに行きます。

昔は20歳前後の人が多かったようです。祭りの2カ月前ぐらいからは週6日練習があるので、今は、勤めている人や大学生は難しいのです。それで段々年齢が下がってきて、一昨年は高校生が選ばれています。

これからのターゲットは高校生。しかし、選ぶといっても、プライバシーの問題などがあって、どこにいるのかわからないのです。学校では名簿は出しませんしね。

だから人づてに聞いて探しています。昔と同じ形ですと続けようと思うと、相当努力をしませんとね。どうしても難しいんですよ」

昔は選ばれることは、若者にとって一世一代の名誉であり、家にとつてもめでたいことなので、母親は息子に紋付、袴を準備して心を配ったものだという。今は、そうした装束も常備され、負担がか

からないようになっていく。

前年に「お弓役」になった若者2名は、師範となって新人の指導に携わり、それが結果として作法の伝承につながってきた。驚くべきことに、師範の役目を終えても8年経って引退するまで、サポートするOBとしての役割は続くという。

「直接指導するのは先生（師範）ですが、4代前の経験者までがチームのようになって教えます。8年経ったら一応卒業ですが、あくまでも卒業であって、完全に切れてしまうということはありません」

というのは2001年（平成13）大学4年生のときに「お弓役」を務めた楠智史さん。仕事の関係で、今は浜松に住んでいるが、この日もわざわざ足を運んだ。

引退後は直接指導することはなくなるが、「お弓役」経験者としての自覚と後輩への配慮は消えることがない。暗がりの中で行なわれる練習を、何となく見守る先輩の姿が、境内から絶えることがないのである。

OBとしての話を聞かせてくれた楠さんや林裕生さん（2002年（平成14）のお弓役）、内藤翔太さん（同、2007年（平成19））が口を揃えて言うには、「お弓」の作法はとにかく肉体的にきつい、というこ



国土地理院基盤地図情報（縮尺レベル25000）「愛知」及び、国土交通省国土数値情報「道路データ（平成7年）、鉄道データ（平成20年）」より編集部で作図

幼いうちから根気よく練習を繰り返す巫女舞の少女たち。少子化で姉妹がいない子が増える中、仲良しのお姉さん、妹の役割をするようになり、それがまた、練習の励みにもなっているようだ。

上：吉浜が、舟運に適した地であったことがわかる地図。そうした伝統が、祭りにも垣間見られる。



「やっただ人ではないとわからないことですが、できるかできないか本当にぎりぎりのところまで追いつめられるんです。そこで踏ん張れたのは、僕の場合は30歳までに何かを残したい、という気持ちがあったからでした。」

やってみて、このきつさがあるから逆に続いてきたのかな、と思います。だてに350年続いてきたわけじゃないんですよ」と

かつては選ばれるべくして選ばれるような「お弓役」だったわけですが、現代は選ばれ方の幅が広がっている。このことは期せずして、親密圏だけでまとまりがちな現代人の交友関係を公共圏にまで拡大することに貢献しているように思う。なにしろ、自分の親や祖父ぐらゐの先輩とも親しく言葉を交わせるし、同じ時期に「お弓役」を務めた者どうしは戦友のような気持ちでつき合える。

「やっただ人ではないとわからないことですが、できるかできないか本当にぎりぎりのところまで追いつめられるんです。そこで踏ん張れたのは、僕の場合は30歳までに何かを残したい、という気持ちがあったからでした。」

やってみて、このきつさがあるから逆に続いてきたのかな、と思います。だてに350年続いてきたわけじゃないんですよ」と

かつては選ばれるべくして選ばれるような「お弓役」だったわけですが、現代は選ばれ方の幅が広がっている。このことは期せずして、親密圏だけでまとまりがちな現代人の交友関係を公共圏にまで拡大することに貢献しているように思う。なにしろ、自分の親や祖父ぐらゐの先輩とも親しく言葉を交わせるし、同じ時期に「お弓役」を務めた者どうしは戦友のような気持ちでつき合える。

「やっただ人ではないとわからないことですが、できるかできないか本当にぎりぎりのところまで追いつめられるんです。そこで踏ん張れたのは、僕の場合は30歳までに何かを残したい、という気持ちがあったからでした。」

やってみて、このきつさがあるから逆に続いてきたのかな、と思います。だてに350年続いてきたわけじゃないんですよ」と

かつては選ばれるべくして選ばれるような「お弓役」だったわけですが、現代は選ばれ方の幅が広がっている。このことは期せずして、親密圏だけでまとまりがちな現代人の交友関係を公共圏にまで拡大することに貢献しているように思う。なにしろ、自分の親や祖父ぐらゐの先輩とも親しく言葉を交わせるし、同じ時期に「お弓役」を務めた者どうしは戦友のような気持ちでつき合える。

とだ。足が腫れて、その腫れが引かないうちにまた次の練習をしなくてはならないから、大の男が逃げ出したくなるぐらいのつらさだと言う。

かつては名誉なことだったが、時間を拘束されることを嫌う現代人が、それほどつらいことを耐えられるものだろうか、という思いがよぎる。

「やっただ人ではないとわからないことですが、できるかできないか本当にぎりぎりのところまで追いつめられるんです。そこで踏ん張れたのは、僕の場合は30歳までに何かを残したい、という気持ちがあったからでした。」

やってみて、このきつさがあるから逆に続いてきたのかな、と思います。だてに350年続いてきたわけじゃないんですよ」と

かつては選ばれるべくして選ばれるような「お弓役」だったわけですが、現代は選ばれ方の幅が広がっている。このことは期せずして、親密圏だけでまとまりがちな現代人の交友関係を公共圏にまで拡大することに貢献しているように思う。なにしろ、自分の親や祖父ぐらゐの先輩とも親しく言葉を交わせるし、同じ時期に「お弓役」を務めた者どうしは戦友のような気持ちでつき合える。

とだ。足が腫れて、その腫れが引かないうちにまた次の練習をしなくてはならないから、大の男が逃げ出したくなるぐらいのつらさだと言う。

かつては名誉なことだったが、時間を拘束されることを嫌う現代人が、それほどつらいことを耐えられるものだろうか、という思いがよぎる。

「やっただ人ではないとわからないことですが、できるかできないか本当にぎりぎりのところまで追いつめられるんです。そこで踏ん張れたのは、僕の場合は30歳までに何かを残したい、という気持ちがあったからでした。」

やってみて、このきつさがあるから逆に続いてきたのかな、と思います。だてに350年続いてきたわけじゃないんですよ」と

かつては選ばれるべくして選ばれるような「お弓役」だったわけですが、現代は選ばれ方の幅が広がっている。このことは期せずして、親密圏だけでまとまりがちな現代人の交友関係を公共圏にまで拡大することに貢献しているように思う。なにしろ、自分の親や祖父ぐらゐの先輩とも親しく言葉を交わせるし、同じ時期に「お弓役」を務めた者どうしは戦友のような気持ちでつき合える。

とだ。足が腫れて、その腫れが引かないうちにまた次の練習をしなくてはならないから、大の男が逃げ出したくなるぐらいのつらさだと言う。

かつては名誉なことだったが、時間を拘束されることを嫌う現代人が、それほどつらいことを耐えられるものだろうか、という思いがよぎる。

「やっただ人ではないとわからないことですが、できるかできないか本当にぎりぎりのところまで追いつめられるんです。そこで踏ん張れたのは、僕の場合は30歳までに何かを残したい、という気持ちがあったからでした。」

やってみて、このきつさがあるから逆に続いてきたのかな、と思います。だてに350年続いてきたわけじゃないんですよ」と

かつては選ばれるべくして選ばれるような「お弓役」だったわけですが、現代は選ばれ方の幅が広がっている。このことは期せずして、親密圏だけでまとまりがちな現代人の交友関係を公共圏にまで拡大することに貢献しているように思う。なにしろ、自分の親や祖父ぐらゐの先輩とも親しく言葉を交わせるし、同じ時期に「お弓役」を務めた者どうしは戦友のような気持ちでつき合える。

伝える仕組みとして

吉浜八幡社では、巫女舞の人数にも、射放弓の「伝える仕組み」を応用したようなやり方を採用している。小学校1年生で巫女に選ばれると1年間の見習いを経て、2年生から5年生まで同じ女の子が続けて巫女さんを務めるのだ。

こちらは射放弓のようにきつい作法はないものの、長く継続する必要がある、幼い本人よりもお母さんに覚悟が求められる。

自分の娘だけ練習についていけないとみんなに迷惑がかかるので、母娘一丸となつての練習が必要だ。作曲をCDに録音するのだそう。

普通の習い事と違って、個人の勝手にやめるわけにはいかないのと、少子化で兄弟姉妹が少ないと、お姉さんの存在、妹的存在の中で社会性が育まれ、「巫女舞」を始めてから、すっかりしてきた」というお母さんの感想も多い。

こうした仕組みは、昔のムラ社会の連帯責任の延長であったとされ、一時期は窮屈であったと遠ざかっていったが、今となってはかえってプラスに働いているようだ。自分だけのためだと頑張れな



祭りの早朝から花車を曳いて歩く行列を、大目付が先導する。神社に戻ってきた大目付は、馬を曳いて馬場を回り〈おまんど〉の幕開けをするが、大縄を背負い、着ている法被（はっぴ）にも縄のモチーフが。



現代の通過儀礼

いけれど、みんなに迷惑をかけるためになら頑張れるからだ。巫女舞という伝統の伝承をしつつ、成長過程で身につけるべき責任感を育むという一石二鳥の仕組みは、多分、射放弓から学ぶべきものが大きかったのではないか。

実は、射放弓の練習期間は年々長くなり、内容は厳しくなっているという。忙しいからと楽に向かうのではなく、より高い目標を設定しているところがすごい。自分が師範になったときに、もっと精度を上げたいと思う人が増えたのが、その理由。これだけの伝統をつなげてこられたのは、

「お弓役」が無事終わったときに、そうした志が芽生えるからに違いない。

誰から強制されるでもなく、自らの中にそうした向上心が芽生えるというのは、楽をしないで身体で覚えたプロセスの積み重ねがあるからだ。

文化人類学では、さまざまな辺境の地で、男子の通過儀礼があることを紹介しているが、射放弓も通過儀礼の一種と見ることができ

る。そのモチベーションとして、かつては農民が帯刀し袴を着る神事

の奉納者に選ばれる、という誇りがあつたわけだが、今の「お弓役」はどのように感じているのだろうか。

「お弓役」経験者たちは、「もう一度やれと言われたら嫌だ」「まったく知らなかったので引き受けてしまったが、わかっていたら断つたかも」と言うが、それはすべて成し遂げた者の言う言葉。この経験が人生のほかの場面で生きていくことに、異論を唱える人はいない。

ただし、たった今、成し遂げたお二人からは「とにかく終わった」という安堵感がほやほやと立ち上っていた。

進学や就職、転勤などの理由で地域から転出することもあるだろうが、家が引越しても、神社は変わらず、そこにある。そこに帰れば仲間がいるという安心感、きつと何ものにも代え難いに違いない。

吉浜の射放弓は、氏神様の現代における可能性を示唆してくれる。吉見喜左衛門も、350年余ののち、自分の定めた神事が、よもやこのような形で役立とうとは夢にも思わなかったことだろう。



節操のない信心

正月の初詣でに始まり、結婚式、地鎮祭、子供が生まれれば宮参り、七五三に合格祈願、と現代人と神様とのおつき合いは結構多い。

仏様とおつき合いも同様だ。メインイベントは葬儀だが、その後も法要が長く続けられるし、寒さの中、除夜の鐘を打つのに並んで待つほど熱心だ。

キリスト教やイスラム教といった一神教に比べると、そんな節操のなさで後ろめたさを覚えることもある。それでも不信心よりもましという強迫観念で、どんな神仏にも手を合わせてお返し、清い水が湧く神聖な所には、ついお賽銭さいせんを上げてしまうのが、今の私たち日本人のあやふやなスピリチュアリテイではないか。

ご都合主義はご先祖譲り

ところが、古代の日本人は「目に見える物」しか信じなかった、と森田悌さんは言うし（14ページ）、神崎宣武さんはアメイバ原理で日本人のご都合主義的な神意識を分

析する（10ページ）。

私たちが後ろめたく思う日本人のご都合主義的の神仏意識は、なんとご先祖様譲りだったというわけだ。

もちろん、神仏への敬虔な気持ちが皆無なのではない。ただ、その気持ちは「目に見える物」と結びついたときにのみ生じる。水然しづかり、風然り、雷然り。

自然現象は目に見えて体感できるから、そこに神が宿ると信じていることができる。へほうき星へほうきぼしの接近や、雨あられのように夜空を走る流星雨を見たとき、ネオンサインも大気汚染もなかった時代には、神仏と人はもっと近い存在だったと確信することができた。

畏怖の心をなかなか抱けないようになつた現代人の文明は、果たして進化なのか、退化なのか。

祭りを機能から見れば

今どきの祭りには、地域活性化や異世代交流、文化の継承といったさまざまな機能が期待されている。祭りがそのような機能を持つことに異論はないが、だからとい

って祭りがすべての問題を解決してくれるわけではない。

祭りでつながる連帯感が、どのようにして醸成されるかは、地域によって事情が異なるだろうし、祭りの構成員が地縁集団なのか職能集団なのかによっても違ってくるだろう。しかし、共通しているのは祭りが行なわれる空間が人を惹きつける「磁場」である、ということではないだろうか。

神崎さんは、祭りとは何も神社で行なわれる神事だけに止まらず、寺で行なわれる法要も家で行なうアエノコトのような予祝行事も、すべてが祭りなのだ、と言う。年に一度の氏神様の祭りでも、数年に一度のおじいさんの法事でも、かつては氏子や家族は引き寄せられるように集って来ていた。

地域が不活性化し異世代で交流がなく文化が継承されない、という現代社会の悩みは、引き寄せられる「磁場」がない、もしくは「場」が「磁力」を失っていることに原因がある。神崎さんが言うように、寺も家も祭りの「場」としてとらえれば、事は氏神様の失墜だけに止まらず、暮らしを司っ

てきた多くの「場」が「磁力」を失っている、ということになるのではないか。

無関心ではいられない

神仏習合や国家神道の成立についても、私たちはあまりにも無関心で済ませているように思う。それらは、風土が育む民族性の根幹を占めている重要事項だ。

河川でいえば、治水にとつて大切な地点には必ず神仏が祀られているように、神仏や祭りには、土地利用や危機管理の知恵がいつぱい蓄積されている。歴史的背景を知ることは、そうした過去の蓄積を見直して、これからの道筋を開くことにもつながるのではないか。

そういう意味で、家で行なわれる祭りにも、地域で行なわれる祭りにも、それぞれに人の暮らしの都合を満たす理由わけがあり、長年続いてきたことにも理由がある。信心だけで続けられるほど、日本人が信心深くないのは前述の通りだ。今の私たちの目には見えない「何らかのメリット」が祭りの裏には隠されているのである。

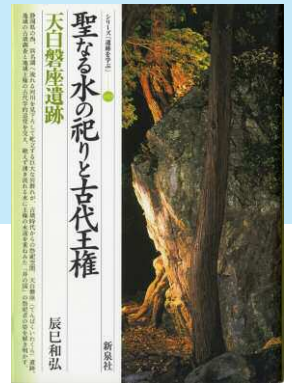
民俗学的見地で、神事の謂れを推測することは可能だろう。しかし、探るべきは、その儀式、礼法にどのような意味があるかではなく、そうした意味を持たせるに至った、その時代に生きた人の都合のほうにあるように思う。

伝統の創造

このような神仏意識を持った日本人が、まったく変わらないものを継承してきたはずはない。いや、変わる必要があるものは変えないが、変わる都合が生じたら、さつさと変えるという現実的な対応をしながら続いてきたものが、現代に受け継がれている祭りと考えたほうが理にかなう。

いつ、どの時点で、なぜ変わったのかを探れば、「場」に「磁力」を取り戻すヒントになるかもしれない。

逆にいえば、新たな「磁場」の構築には、前向きなエネルギーが不可欠だ。「変えること」で得られるメリットを、祭りの中に見出せるぐらい想像力が豊かになれば、「磁力」は取り戻せるはずである。



水の文化書誌 28

《水の信仰・祀り・祭り》

何故、人々は年の初めに神社に参るのだろうか。2011年もまた、日本の多くの人たちは家族連れで神社に参拝した。家族の無病息災、家内安全、五穀豊穣を祈った。その心底に流れる心裡は家族の幸せである。幸せになりたい願望である。

古代人は山に、川に、海に神を見ていた。太陽や月に、大樹や巨岩にも神をみた。森羅万象に神が宿る思想である。そして、人々は森羅万象の神に祈った。あるお婆さんは、起床して、先ず手と顔を洗い、口を漱ぎ、ベランダから東に向かって、日



古賀 邦雄

こが くにお

水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業

水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社

30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集

2001年退職し現在、日本河川開発調査会筑後川水問題研究会に所属

2008年5月に収集した書籍を所蔵する

「古賀河川図書館」を開設

URL : <http://mymy.jp/koga/>

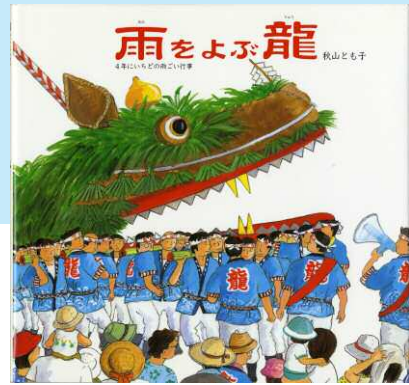
の出に手を合わせ、夕方には、西に向かつて夕陽に祈った。それは太陽が上がるのが関係なく、一生涯祈り続けた。その娘さんが帰るときに、「今日は夕陽がきれいだから、拜んで帰れや」と言われたという。現在ではこういう人は極端に少なくなった。巨岩にも神が宿る。辰巳和弘著『聖なる水の祀りと古代王権』天白磐座遺跡（新泉社2006）は、静岡県引佐町（現・浜松市）井伊谷地区の神宮寺川流域に巨岩群が連なり、この地における神の祭祀にかかわるその発掘調査である。巨岩群は涓伊神社の背後を護るように盛り上がった小丘陵地・葉師山のいただきにある。「祭祀場は岩の巨大な壁が屹立する側を除く三方が神宮寺川に閉繞されている。」

川の瀬音は磐座の岸壁に跳ね返り、そこで祭祀を実修する祝らを四方から包み込む。そこが水の聖地であることが体感される」と述べる。さらに著者は「涓伊神社々前の広場から神宮寺川へ、急傾斜の細い道をくだる。川を横切る堰が設けられ、塞き上げられた水は左右両岸に築かれた用水路を経て分水され、井伊谷盆地内の過半の水田を潤し稔りをもたらす。磐座をいただく葉師山は井伊谷盆地の喉元、水分の地を占めている。井伊谷に住む人びとの命の源。換言すればそれは『うぶすな（産土）』の地でもある。それこそ、古代人がここを神の座と定めた第一の要素であったとわたしは結論づけた。そこに祀られた神が「水の神」「井の神」であったというこはいうまでもない。：神宮寺川と葉師山からなる水分の地という空間のなかで、カミ祀りにもっとも適した場として岩群れとそれをとり巻く環境が選択されたのである」と。このように神聖な祭祀場となる必然性を分析する。余談であるが、この井伊谷地区は徳川幕府の譜代大名井伊家の発祥の地でもある。

さらに、古代人の水辺の祭祀に関する書に、森浩一他著『水とまつりの古代史』（大巧社2005）、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『水と祭祀の考古学』（学生社2005）がある。この2書は、水の祀りを治水や灌漑の土木技術から捉えており、古墳時代集落での導水施設のあり方、古墳での導水施設形埴輪のあり方、導水施設の埴輪化の意義、導水と湧水祀りの観点から論じる。古代人の神聖なる水の祀りの場に、現代にも繋がる導水施設という高度な技術力が発達していた。導水施設が農業用水、飲用水だけでなく、むしろ祀りのために敷設され、それが重要な役割をもっていたことに驚嘆する。

水分神社について、白井永二・土岐昌訓編著『神社辞典』（東京堂出版2005）には、水分神は、流水を司る神で、「くまり」は「配り」を意味する。この神は速秋津日子・速秋津比売2神御子神とされ、天之水分神と国之水分神の2柱がある。この水分神を奉斎するのが水分神社で、葛木水分神社、吉野水分神社、宇太水分神社などがあり、朝廷より五穀豊穣を祈願されている。

菅田正昭著『日本の祭り』（実業之



日本社(2007)に、生活の重要な節目で、祭場を設けて神の降臨を仰いで祀り、祭りが執り行なわれ、やがて恒常的な祭りの施設、神社がつくられるようになったとある。

日本の祭りは必ず神が中心であり、神社が場である。その神社に神がやってくる。その神の訪れを「待つ」のが「祭り」の起りであるといひ、「きよめ」「みゆき」「きそい」「わざおぎ」「おくり」で表わされる。「きよめ」は、穢れを排して清浄を重んじ、神の前に出るためである。「みゆき」は神霊が移動することである。

祭りで神輿や山車が登場すれば、御幸祭である。「きそい」は、祭祀共同体の成員集団の吉凶を占うために行なわれる。綱引き神事は海方と陸方の競争で、勝ったほうに豊漁、豊作が予祝される。技をヲク(招く)のが「わざおぎ」であり、芸能で神や人の心を和ませるものである。古代人は田植でも笛や太鼓を打ち鳴らし、唄を歌って田の神の心を弾ませ、豊作を祈ってきた。「おくり」は、神を迎えて、人との交歓が済むと、神を天や海の彼方などに帰してもらい、神送りの儀礼で送る。「おくり」の祭りには、アイヌ民族の「イヨマント」(熊送りの意)がある。アイヌ民族にとつて、熊は山に棲む神であり、人間に毛皮や肉を贈って帰っていくとされ、踊りを舞って別れを惜しみ、鄭重に送られる。

加藤健司著『日本祭礼民俗誌』(おうふう2000)、岡村直樹著『とおきの里祭り』(心交社2008)に網羅される全国の祭りの中から幾つかを追ってみたい。

岩手県奥州市にある於呂閉志神社(おき)において、例年4月20日前後の大安の日に胆沢平野土地改良区主催の「円筒分水工放水式」が行なわれ、胆沢平野9300haに水が入る。円筒分水工は、複数の水路に公平に水を配分する現代の水分である。そこにはミクマリの神が舞い降りてくるようだ。地元の西風神楽保存会によつて、神楽が奉納され、式典は終わる。

長野県上田市の西南、別所温泉で行なわれる「岳の幟」は、早魃に悩まされてきた塩田平の農民たちの雨乞い行事である。太い竹竿に青笹のついた細竹を結び反物をつけて幟とし、毎年7月15日に近い日曜日、別所温泉の西に聳える男神岳(標高1250m)の水神である山頂九頭龍権現に雨乞いを祈願する。

兵庫県三田市上本庄に鎮座する駒宇佐八幡神社では、慈雨への願いを一途に「雨乞いの百石踊り」が奉納される。氏子8カ村が武庫川上流の4カ村の上谷、下流の4カ村の下谷の二組に分かれ、年番交代で神社に奉納する。

雨乞いで有名なのは、埼玉県鶴ヶ島市の「脚折の雨乞い」祭りである。麦の穂と竹でつくられた龍蛇は神官によつて入魂され、龍神となる。長さ36m、重さ300kgもある龍神を、太鼓やホラ貝の音を先頭に、300人の担ぎ手が雷電池へ運び、板倉雷電神社から前日いただいた水を池に注ぎながら、担ぎ手と一緒に池に入っていく。「雨ふれたじゃく、ここにかかれ黒雲」の願いの声とともに

に、龍神は水しぶきを上げながら、池の中を数度回り、最後に解体される。このとき龍神は天に昇つて黒雲と雨を呼ぶという。4年に1度の祭りであり、この脚折の雨乞いを描いた児童書に、秋山とも子文/絵「雨をよぶ龍」(童心社2009)がある。

宮澤和穂著『戸隠竜神考』(銀河書房1992)によれば、密教の霊場、修験の山として、神社としての戸隠のルーツはあくまで水神としての龍神であり、それは降雨の神であり、治水の神であり、即ち農業の神であったという。また雷については、青柳智之著『雷の民俗』(大河書房2007)にくわしい。隣の韓国でも雨乞い行事は古くから行なわれている。

任章赫著『祈雨祭—雨乞い儀礼の韓日比較民俗学的研究』(岩田書院2001)では、雨乞いを仕切る王が雨を呼ぶことができなかつた場合、「農民から殺される運命であつた」と論じる。雨乞いの祀りは、あまりにも過酷であつた。

大阪天満宮文化研究所編『天神祭—火と水の都市祭礼』(思文閣出版2001)によれば、天満宮は「学問の神様」菅原道真を祀るが、天神信仰は平安中期に成立し、疫病や凶作の流行を退散、平癒を約束する「疫神」であつた。学問の上達を祈願する習慣は一般庶民が教育の必要性に目覚めて以降であるという。大阪府北区の天神祭は7月24日に宵宮、25日に本宮が執り行なわれる。午前4時、一番太鼓と一番鉦が響き渡り、本殿で宵宮祭が行なわれ、続いて白木の神鉦を携えた神童と供奉人たちの長

い行列が斎場まで練り歩く。斎船が堂島川の中央まで漕ぎ出され、神童の手で神鉦が流され、祭りの無事と大阪の繁栄が祈願される。本宮では午後7時から天満橋上流大川を舞台に水上祭・船渡御が行なわれる。京都・祇園祭の山鉦巡行が洛中の町並みを舞台にした祭礼であるのに対して、天神祭の船渡御は水の都・大阪の都市空間の魅力を最大限に生かした祭礼である。

福岡県田川市の風治八幡神社と白鳥神社の川渡神幸祭は、5月第3日曜日とその前日に、神社から約1km離れた遠賀川水系彦山川で行なわれる。田川郷土研究会編・発行『川渡り神幸祭—福岡県における川渡り神幸行事調査報告書』(2000)によると、緋の旗さし物の幟山笠や、太鼓山車山台を鉦や太鼓の囃子も勇ましく、川幅70mを渡つて、川向こうの御旅所(頓宮)に行く。起源は永禄年間(1558~1569)悪疫流行の際、御願成就の御礼に始められたといひ。

以上、幾つかの書により、日本の水祭りを追ってきた。想うことは、日本の自然の豊かさ、そこに古代人は神が宿ると神聖化し、それを崇拜しながら祀ってきた。幸福を願ってきた。このことが現在まで、祭りが各地域において綿々と継続されてきた根幹と、いえるであろう。



古賀市ふるさとと見分け

阿部 友子 あべともこ

ふるさと見分け実行委員会代表
里川を愛する会事務局

「ふるさと見分け」とは、さまざまな立場の人たちが、一緒に現場を歩いて、多角的な側面から地域の歴史、風土を見直そうとするフィールドワーク&ワークショップです。福岡・博多から快速電車で20分、玄界灘に面した古賀市では、哲学、宗教学、河川工学、生物学、歴史、環境、市民運動などの専門家、活動家と一緒に会して、古賀市のふるさと見分けを行いました。

福岡・古賀市で生まれ育った私にとつての里川は、清滝を源流とする大根川です。西山（鮎坂山）から西に流れ、花鶴丘で谷山川と合流し、花鶴川と名を変えて玄界灘に注ぐ、わずか12kmの川です。

大根川という名の川は全国にあって、石がゴロゴロしていて、普段は水が地中に捌けてしまうような川をいうそうで、古賀の大根川にも、水が干上がることを説明するような逸話があります。

諸国行脚の途中に筵内に立ち寄った空海（弘法大師）が空腹になったとき、老婆が大根を洗っているところに行き逢わせました。空海は大根を分けてほしいと頼みますが、みずほらしい格好だったために、その老婆はひどい対応をしようのですね。見た目だけで人を判断してはいけないと、空海は戒めのために杖を地面に三度突き、大根川の水を干上がせたいのです。

ところが今の大根川は、昔とは少し様子が違ってきます。アズ（泥）が川底に溜まって、河川敷いっぱいには雑草が茂り、水が滞留して見苦しい景観なのです。九州大学名誉教授の小野勇一先生によれば、30年前に川を遡って調査したときには15種類ものカエルが見つかったのに、今では1種類ぐらいになってしまったということ。景観的にも生態的にも、とても貧しい川になっているのが残念で、2004年（平成16）に「里川を愛する会」を立ち上げました。

川は古賀市の景観を考える上でも、まちづくりを考える上でも、重要な要素です。多くの人が「なんとかしたい」と考えています。蛍の幼虫を飼育して古賀の川に放流したり、水辺の学校などの活動をしている「ほたるの会」もありました。

2009年（平成21）には、美しいまちづくりプラン（景観基本計画）への取り組みの一環として、10名の市民からなる「景観まちづくり市民会議」が開催され、これが「古賀美観の会」へと発展しまし



国土地理院基盤地図情報（縮尺レベル25000）「福岡」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成19年）、道路データ（平成7年）、鉄道データ（平成20年）」より編集部で作図



上：12kmの大根川（だいこんがわ）の流域を歩いた〈ふるさと見分け〉。翌日は市役所2階のホールで、ワークショップが行なわれた。フィールドワークで現場を見て、ワークショップで学びを深める。こうした地につけた活動が、地域の宝を発掘する。中央で挨拶しているのが阿部友子さん。下：大根川中流域の様子。



た。さまざまところで活動していた、景観や環境まちづくりに興味がある市民が〈古賀美観の会〉にまとまってきたのは、みんなが「ふるさと古賀を良くしたい」という思いで結束しているからだと思えます。それで「なんとかしたい」という気持ちを形にするために、まずは古賀に住む人が、古賀がどんな町なのかを認識することから始めようと考えました。その上で、この土地に合った川づくりをしよう、ということ、川の現状と古賀の歴史資産をみんなで見えて回りました。

まちづくりを盛り立てるのは「他所^{よそ}モン」と「のぼせモン」と「ばかモン」。古賀市民ではない、外からの視点も大切と思って、九州大学の島谷幸宏先生に相談に行ったところ、島谷先生は、現地調査をもとに地域の空間構造を分析することで、今まで当たり前過ぎて見過ごしてきた地元のことを光ってみえてくるよ、と教えてくれました。地形を見て、古地図と比べ、集落の名称や神社の成り立ち、言い伝えといった情報を収集する。つまり、良い川づくりに不可欠な、地域の「価値」の再評価をフィールドに出て行なおう、というのです。

その後、思いもかけない展開で「ふるさと見分け実行委員会」を立ち上げ、2010年（平成22）12月に「古賀市ふるさと見分け」を開催することになりました。「ふるさと見分け」とは、地域の人を巻き込み、関心を持ってもらう人を増やしていくための手法で、東京工業大学の桑子敏雄先生が考案されたものです。

桑子先生をはじめ、島谷先生、兵庫県立大学の合田博子先生と岡田真美子先生まで来てくださることになり、一緒に活動しているメンバーからは「阿部さん、本当に大丈夫なの？」と心配されたほど。しかし、ご厚意に甘えて、先生方には大いに協力していただきました。こういうときは、女性のほうが度



胸が据わるのかもしれませんが。

実際のフィールドワークでは、ここも見たい、あそこも見たいとどんどん寄り道してしまい、まったく予定通りには進みませんでした。それだけ、見所がたくさんあるということで、新たな発見に驚くばかりです。

標高は57・5mと低いのですが、かつては三峰からなる三神山(三上山)だった鹿部山は、古賀市のシンボルとして親しまれてきました。しかし、団地造成のために二峰が消失してしまったのです。造成された東峰、中央峰からは、二つの古墳群が発見され、調査にあたった故・長崎初男先生は、残った鹿部山は絶対に消してはいけない。ここには日本の歴史を変えようとするものが埋まっているはずだ、と言い残されています。

犬鳴山山系に端を発した大根川は、玄界灘に流れ出ていきます。そこには新宮から古賀、福津、津屋崎までの約10kmにわたる日本有数の松林が続いています。これは人手で植えていった成果であることが、1706年(宝永3)の記録からわかっています。そして、少なくとももう少し前まで遡れるであろうことを、古賀美観の会 会員の宿理英彦さんが調べてくださいました。

こうした歴史を発掘し、私たちに教えてくれる仲間も増えてきています。地元に興味を持つ人を少しずつ増やしていくことは、古賀を住み良い町にするために必ず役に立つ、と思います。

敷地内で十三仏板碑を発見され、大切にお祀りされている高川さんは、子供のころ、ご自宅に勾玉の首飾りがあって、おもちゃにしていたら糸が切れてどこかに紛失してしまった、というスゴイ経験をお持ちだということが、今回のフィールドワークでわかりました。

それを聞いた岡田先生と合田先生は、神功皇后が



治水上、重要な箇所には必ず神社や大木が立っている。地図を片手に、その地の歴史や由来に思いを馳せると、1000年、2000年はあっという間に飛び越えてしまう。いつもと違う自分に出会える。上は、十三仏板碑をお祀りされている高川さんのお話に聞き入る参加者たち。



岡田先生と合田先生はまた、仲哀天皇は三韓征伐に反対したために暗殺されたのだ、とも。武内宿禰が仲哀天皇を葬ったとされますが、古賀には至る所に「スクナヒ（ビ）コナ」を祀った神社があります。スクナは宿禰とも書くのですね。「スクナヒ（ビ）コナ」は、天照大神の前の皇祖神であった神産巢日神の手からこぼれた小さい神で、大国主と共に国づくりをした神です。

「スクナヒ（ビ）コナ」は「ヒ」のつく地に多く祀られていて、「ヒ」の国のひとつ「肥」の国には「古賀」の地名が集中しています。その古賀群の一番北の入り口が大根川流域の古賀なのです。

「古賀市ふるさと見分け」をしたことで、思いがけない発見がたくさんありました。大根川を里川と想っていた私自身、この川に秘められた力と可能性を再認識することができたと感謝しています。

日本武尊（やまとたけるのみこと）の次男である仲哀天皇は、仲哀8年（199年）熊襲（くまそ）討伐のため神功皇后とともに筑紫に赴くが、神懸りした妻の神功皇后から住吉大神のお告げを受ける。西海の宝の国（新羅（しらぎ）のこと）を授けるといふ神託だったが、仲哀天皇は、これを信じず住吉大神を非難したため、神の怒りに触れ、翌年2月に急死した、といわれている。そのとき神功皇后が仲哀天皇の神霊を祀ったのが香椎宮の起源とされる。椎の木は良い香りがするから、腐敗した遺体の匂い消しの役目をすると考え、「香懸」の名は、仲哀天皇の遺体を立てかけた椎の木、「棺懸（かんかけ）の椎」が敷地内に立っていたことに由来する。

神功皇后は住吉大神の神託に従い、夫の死後、お腹に子供（のちの応神天皇）を妊娠したまま海を渡って朝鮮半島に出兵し、新羅を攻めた。「日本書紀」には、新羅は戦わずして降服して朝貢を誓い、高句麗（こうくり）・百濟（くだら）も朝貢を約束した（三韓征伐）と記されている。

仲哀天皇も神功皇后も、実在の人物ではない、という説もあり、そんな神話時代の話を、史跡歩きから想像するのも大変エキサイティングな体験でした。

祠を建て仲哀天皇の神霊を祀ったのが起源とされる福岡市東区の香椎宮は、実はこの地だったのではないかと、という仮説を立てられ、大いに盛り上がりました。



ミツカン水の文化交流フォーラム2010が
開催されました

水は誰のモノ？

公平と循環を両立するために

日時：2010年10月15日（金）13時30分～18時
会場：東京ウィメンズプラザ



【問題提起と報告】

健全な地下水循環への取り組み 熊本県の事例から

小嶋一誠 前・熊本県環境生活部水環境課課長

水資源は誰のモノ？ 水法の観点から

宮崎 淳 創価大学法学部教授

日本と世界の水ビジネス 現状と将来

中村吉明 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）研究開発推進部長

途上国の水道事情 開発援助の現場から

橋本和司 八千代エンジニアリング株式会社国際事業本部顧問

【登壇者全員によるディスカッション】

公平と循環を両立する水事業と水文化とは

コーディネーター：沖大幹 東京大学生産技術研究所教授

写真：左から登壇者の宮崎さん、小嶋さん、沖さん、中村さん、橋本さん。

今、水道事業をはじめとする水ビジネスが大きな関心を集めています。

水ビジネスに必要な「水」

この水は誰のモノ？

費用負担と受益者は誰なのか？

適切な水ビジネスを実現するには、その土地に適した市場公共制度やビジネスモデルを考えなくてはなりません。

本フォーラムでは「公平と循環を両立させる水文化」について広く討議していただきました。

問題提起と報告

■熊本県は全国でも先駆的な水循環保全政策を実施している。2008年（平成20）の「地下水総合保全管理計画」策定に大きな役割を果たした小嶋一誠さんは、地下水の宝庫と呼ばれる熊本県の水循環について説明した。県内には1000カ所以上の湧水があるが、住宅や工業団地、パワーセンターの設置、水稲作付面積の減少により地下水涵養量が減っている。地下水の目標涵養量を定め、年間地下水採取量についてもモニタリングする取り組みを行っているが、今後規制強化が必要となる可能性がある」と説明した。

■水循環と水の財産権の関係を考える上で、どうしても欠かせないのが水法の観点。日本で数少ない民法からの水法研究者である宮崎淳さんは「流水は誰に帰属するのか」と問い、水の財産権について解説した。「水のコア部分には公共性があり、水権利

を取得した時点で、そこに財産権的性質、つまり私権性が覆い被さる。例えて言えば、あんパンのようなもので、あんが公共性があり、パン生地である私権性が公共性を包み込む」とわかりやすく説明。水循環を考える上では従来の公水・私水二元論は適切ではないと語った。

■経済産業省で水ビジネス政策にかかわった中村吉明さんは、グローバルな水ビジネスの現状を解説。「世界の水ビジネス市場は、2025年（平成37）には87兆円の市場に成長する可能性がある」とし、日本企業と海外水メジャーの動きを説明。省水化技術と膜技術は日本の強みとなる一方、縦割り行政に起因する戦略性の欠如、包括的業務委託の実績不足、高コスト構造が日本の水ビジネスが直面する大きな課題であることを述べ、海外のニーズに適切に対応していくことが重要と唱えた。

■海外開発援助の現場に30年にわたって携わってきた橋本和司さんは、途上国での水道事業を民間が行なうのは公平性の点でもプラス、と述べた。途上国の水道事業が遅れている理由はマネジメント問題にあり、公的セクターに任せることで、むしろ公平性が損なわれる現状があるという。日本の水道業界が培ってきた無取水対策を中心とする水道マネジメントの手法や、顧客サービス重視の水ビジネスモデルは有効性を発揮するだろうと結んだ。

ディスカッション

コーディネーターの沖大幹さんは、各登壇者に「水を守って〇〇を守る」

と聞かれたらどう答えますか、という質問を投げかけ、水事業の意義を問いかけた。小嶋さんは「水を守って地球を守る」、宮崎さんは「水を守って地球を守る」、中村さんは「水ビジネスを振興することで日本経済を守る。日本の国益を守る」、橋本さんは「水ビジネスを頑張らして、元氣な日本にしよう」と答えた。それぞれに共通、あるいは異なる公共性を細かく議論することが、今後の戦略的かつ本質的な水ビジネス論に必要なことを痛感させてくれたフォーラムだった。詳細については、当センターホームページをご覧ください。（文責：編集部）

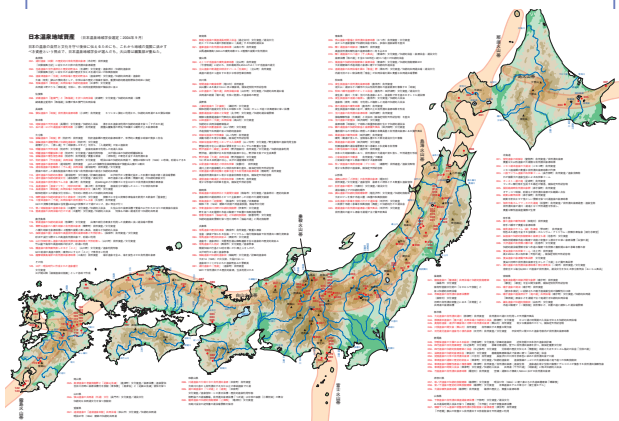
アンケートに寄せられたコメント

- 水事業の民営化には反対だったのですが、状況や場合によってはやるべきだと知らされました。（学生）
- タイムリーでもおもしろかったです。できればもっと現地（アジア）の状況、水の使われ方、給水装置の話が聞きたかったです。（公務員）
- 日常、農作業をしている観点から水の大切さを痛切に思っています。今回のようなフォーラムに参加し、あらためて多くの人に、特に子供世代に話をしたいと考えます。（無職）
- 水法についてまったくといていはいほど知識がなかったので、非常に参考になった。（市民団体、NPO関係者）
- 中村さんの「技術に頼りすぎるのは良くない」という話は身につまされた。新しい話の切り口が聞けてよかった。（会社員）

■水の文化38号予告

特集「地図の文化」(仮)

時代によって変化する社会的地理情報は、水文化の表現に、どう影響を与えてきたのか。地図に描かれた情報、さまざまな地図づくりにかかわった人々や来歴を探り、地図の文化と生活のかかわりを学びます。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。

すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

編集後記

◆「祭り」はイベント的な側面しか見ていなかった。神事としての側面もこれからは見ていこうと思う。参加する人、見る人、祭りは人を惹きつけ最近稀薄な「人の交流」を提供してくれる場だと思えます。(宮)

◆祭りの目的も始まりは祈願・慰霊・供え・執政などさまざまだったろうが、超自然的存在への様式化された行為が、現在は娯楽的イベントになっている感がある。時代とともに「祭り」の機能も変遷して、今では社会教育の場や地域コミュニティの活性化等がそれに変わっているのだろうか。(新)

◆子供を身籠ってから取材した「射放弓」は、新たな視点で物事を感じることができ、私にとっては思い出深いものとなりました。少々後ろ髪を引かれながら産休に入りますが、今年は陰ながらセンターを応援していきます！(松)

◆子供の頃の記憶では、町内会のお祭りは賑やかだった。それも子供が多かったからであって、最近では御神輿の担ぎ手も他から来ている。子供がいなければ参加のモチベーションはない。特色も伝統もない普通の祭りであろうと思ったら地元を盛り上げられるのか。悩む町は多いはずだ。(ゆ)

◆調べるほどに「機能」はわかってても、「かたちの意味」がわからなくなる祭りの世界。どこまで想像の翼を広げてよいのか迷うが、そこでとまどうのが現代人。イベントは増えるが祭りが衰えるのもうなずける。(中)

◆地域のエネルギーが集まる祭りでは、誰もが主体性を持って参加し、誰にも「居場所と出番」がある。非日常の「祭り」のメカニズムを、日常の「政」にも反映できる社会が望まれる。(緒)

◆森田梯さんの文中に、祖父母四人の名前を言えるかというお話が出てきたが、三人までしか思い出せなかった。一人は若くして亡くなったので、会ったことがない。日本人は存在しないものに対して認識がないというのは妙に納得ができた。(万)

◆田の神さまとも、山の神さまや水の神さまとも、関係が薄い今の都市生活。しかし人間がどんなに進化しても、思い通りになることは、ほんのわずかだ。持続可能な社会をつくるために不可欠なのは、人智を超えた存在への畏れと感謝ではないか。(賢)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第37号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複写

発行日 2011年(平成23)2月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 宮崎真次 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 中庭光彦
緒方大輔 原田朱野 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中塾ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 広報室内

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局

〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506



ミツカン水の文化センター

表紙上：天神祭の本宮。ご神霊が移られた御風華を中心に、催太鼓や地車、獅子舞など各講社がお供して天神橋北詰の乗船場まで3kmを行く陸渡御。その渡御列発進直前の境内。

表紙下：盛夏のさなか、祭りは暑さを熱さに変えてしまう。天神祭の獅子舞。

裏表紙上：釜の湯をいただいて、無病息災を祈る遠山郷霜月祭りの観光客たち。
観光客を温かく受け入れる遠山郷の人々の気風も、この祭りの人気に一役買っている。

裏表紙下：左 奥能登アエノコト、時国家のお供え。塗りのお膳は能登ならではの風格だ。

右 吉浜八幡社での巫女舞練習を見守るお母さんたち。1年生で巫女に選ばれたら、中途ではやめない覚悟が必要。責任は、本人より母親に重く感じられるのではないか。

